
おいしい彼女

御劔剣次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おいしい彼女

【Nコード】

N8347B

【作者名】

御劔剣次

【あらすじ】

今まで普通に生きてきた少女シェリル。しかしある日、別の世界からやってきたヴァンパイア、レンに襲われ、彼の“もの”にされてしまう。そして、ヴァンパイア達の争いに巻き込まれ、その中で徐々に自分の正体に気付いていく。そして彼女は 「 本編、13部にて完結」

畏怖に出会い、自、闇に転ず（前書き）

この物語は、魔法世界ではなく、本当に現代社会を舞台としておりますので、魔法などをお求めの方は、他の作品をお探しください

畏怖に出会い、自、闇に転ず

少女が一人、丁字路の突き当たりの壁にもたれかけ、座っている。目の前の非現実的な光景から目を逸らすことができず、脳内で、目の前の惨劇を否定し続けている。唇はわなわなと震え、目蓋は全開まで開いている。その瞳に映るものは、地面に転がる数体のひからびた死体と、道の真ん中にたつ青年だった。

「生き血なんて、久しぶりだな。まだまだ足りないな……まだまだ」そう嬉々とした声色で言うと、青年はゆっくりと振り返り、その視界に少女を収める。少女は青年と視線が合うと、体をビクツと跳ねらせ、顔の恐怖の色を濃くした。次は私。少女は恐怖のあまり、声すらまともに出せなかった。

青年がゆっくりと歩み寄る。少女は後ろに下がろうとしたが、もうすでに背は壁に付いている。手足が不様に動くのみ。ああ、どうしてこうなったんだろう。友達と別れたあと、家に向かっている途中、何かが倒れるような落ちるような音が聞こえたから、そっちに振り返ったら……。少女の回想は、そこで途切れた。青年がすぐ目の前まで迫っていた。

「あ、いや……」

擦れた小さな声しか出なかった。それが、彼女が大声で助けを呼ぼうとしたが、首を絞められているかのような感覚を覚え、やっと絞りだした声だった。青年はしゃがみこみ、彼女と視線をあわせる。「痛いのは噛んだ瞬間だけ。あとは、体の力が抜けて気持ち良いよ」青年は柔らかく微笑む。少女は、青年の藍眼とその微笑みに、一瞬ドクンと強く脈打った。恐怖からではなく、綺麗だ、と思ったからだ。少女の動きが止まった瞬間、青年はすばやく、右手を彼女の顎に添え、左手で彼女の右腕を掴み、左右の手を逆方向に開く。丁

度、少女の右側の首筋が伸ばされる形になる。

「あ……あ……」

彼女は抵抗らしい抵抗をしなかった。精々、足を軽く動かしたり、頬に涙を伝わせ、祈るように目を瞑る程度だ。その様子を楽しむように見た青年は、彼女の首筋に口付けをした。少女は体を一瞬震わせる。

「痛いのは、一瞬さ。本当に一瞬。あとは快樂だけ」

そう彼女の耳元で囁き、鋭く伸びた犬歯を首筋に添える。彼女は針が刺さるような痛感を感じたあと、体全体の力が抜けていくのを感じた。彼の言った通り、痛みは一瞬で、あとには快樂にさえ思える脱力感があった。

ああ、私、死ぬんだ。そう思ったが、不思議と悲しみは沸き上がらなかった。むしろ、現実を生きること疲れ始めていた彼女にとって、感謝の念すら浮かんだ。

「ありがとう……」

無意識の彼女は、そう口走った。彼女の体から力が抜けると、青年は口を、彼女の首筋から放した。不適に微笑むと、彼女を抱えて近くの住宅の屋根の上へと消えていった。

歯車は揃わず、今、時を刻む

町の中は、パニックに近い騒動になっていた。町の真ん中、それも一般の路上で、体液が全て吸い上げられた死体が四体も転がっていたのだから。第一発見者となった女性は、その死体と目が合ったらしく、精神的興奮が納まってはいない。

警察も、この奇妙な死体には首を捻るばかりだ。体中の体液がすべて、一滴残らず無くなっていたのだから。まるで天気干しした干物のように。事件現場は、幾人かの嘔吐物と、死体からの干物化した時の特有の臭気によって、近づくだけでも吐き気を催す状況になっている。警察ですら現場には近付きはしなかった。必要最低限の調査と処理を行ったあと、付近を立入禁止区域としていた。業者に頼んで洗浄してもらったが、今だに臭気は落ちていない。

「カッカカ……間違い無え、人の怨念の臭いだ」

立入禁止と書かれたイエローテープに囲まれた路上に、一人の青年が立っていた。背筋はだらしなく、ほぼ九十度に曲がり、服やジーンパンには、歩く度にジャラジャラと音がしそうな程までに鎖が付けられている。茶色に染められた髪は無造作に伸ばされ、あちこちで跳ね上がっている。右耳には三つ綺麗に輪型のピアスが並んでいる。どこからどう見ても、その青年はチンピラにしか見えなかった。「体液が抜かれてた、か。間違いなく同族の仕業だな」

その青年は、妙に甲高い声でつぶやくと、軽く膝を曲げ、跳躍した。次の瞬間には、近くの民家の屋根の上にいた。そのまま、青年は屋根伝いに消えていく。

薄暗い部屋。妙に整頓された室内には、小さな机と椅子、ソファ、そしてベッドが置かれているのみだった。そのベッドの上には、寝息を立てる少女がいる。

「ねえママ、いつ着くの？」

暗い空の下、淋しい田舎道を一台の乗用車が走る。日がすっかり落ち、空には厚く雲が張り、地上の明かりはその乗用車のヘッドライトのみとなっていた。

「待ってねーシェリルちゃん。もう少しだから」

「まったく、せっかちなシェリルは。ほら、見てごらん。町の明かりが見えてきたよ」

両親の言葉を聞いたあと、後部座席に一人座っている少女は身を乗り出し、前方に見える。遙か前方に、ぼつぼつと小さな明かりが見えていた。少女は、やっと退屈な時間が終わると思い、思わずはしゃいだ。母親が笑顔で軽く注意し、父親も笑った。

幸せを絵に表したかのような、暖かい情景。

そんな家族に突如、不幸は降り注いだ。正面に、こちらに向かってくる二つの光の粒があった。父親は、道が暗いこともあり、多少の注意は向けていた、つもりだった。その光の粒は徐々に近づいてくる。そして、何を思ったのか、光の粒二つは突然反対斜線に侵入した。父親がその様子に気が付いたのは、もはや避けようのない距離だった

ふと、ベッドの上の少女は目を覚ました。ゆっくりと瞳を開け、沈む気持ちを感じた。なんで、あの日のことを思い出したんだろ。

少女はそうつぶやき、自分の状況考えた。

「あれ？ 私……」

死んだんじゃないかったつけ。体を起こし、質素な部屋のなかを見渡す。

確かに私は死んだ。怪人に血を吸われて死んだはず。私も、あの時道に転がってた死体の一つになるはずだった。しかし、自分の手

を眺めてみても、いつもとかわらず、色白で張りのある手があるだけだ。

しばらく考えたが、寝呆けているのか、頭は回らなかった。彼女は考えるのをやめ、ベッドを降りる。立ち上がろうとしたが、力が入らない。気が付くと、体を倦怠感が支配していた。仕方なく、再び横になる。疲れはしているが、眠くはなかった。しばらくするとドアノブをひねる音が部屋に響き、ドアから青年が入ってきた。見覚えのある、深緑の髪に、藍色の瞳。自分を襲った青年。彼女は思わず後退りをする。きれいに整えられたシーツや布団が乱れる。

「うん。その様子だと大丈夫そうだね」

青年はやさしく微笑み掛け、少女へと近づく。少女はさらに下がるうとしたが、体がそれ以上動かなかった。青年は、その吐息を感じられるまで少女に近づいた。ほぼ体が重なる。

「僕はレン。君は？」

レンと名乗る青年の言葉に、一瞬理解が遅れた少女。その理由は、その藍眼に見入っていたためだった。しばらくの沈黙の後、少女の思考がやっと追い付いてきた。

「わ、私は……シエリル」

少女の今の心に、恐怖はその鱗片すらありはしなかった。ただ、美しいという感情が心に広がる。それと同時に、その藍色の瞳に隠されたレンの本性、深い悲しみ、そして、すべてを無へと帰する程の憎しみを感じていた。シエリルは、なぜか昔からそういう危険な匂いには敏感で、深く引かれるのだった。

「恐がらせてごめん。君の家はどこだい？ 送ってあげるよ」

その息遣いは甘く、シエリルの思考は溶けていきそうだった。なんとか自我を保ち、彼の肩をゆっくりと押し、互いの体を引き離す。彼女は呼吸を整え、レンに向き直る。

「いえ、結構です」

これ以上彼の傍に居たら、どうにかなりそう。彼女はそっとベッドから立ち上がり、ふらつく足取りで部屋の出口へと向かう。思う

ように体が動かない。一步踏み出すごとに、体が崩れてしまいそうになる。二歩、三歩と歩みを進め、足がもつれる。急に変わった体の角度を修正できるほど力はない。軽い悲鳴とともに、適度にやわらかい筋肉質の胸へと抱かれる。

「まだ、完全に生命力が戻ったわけじゃないみたいだね。無理しない方がいいよ？」

レンはやさしく言葉をかけるが、彼女は彼の抱擁を抜けようとする。しかし、体の倦怠感がそれを許さず、結局、ベッドへと戻された。フルマラソンを終えた後、体力だけが回復したかのように手足に力が入らない。彼は、何度も立ち上がろうとするシェリルを手で制し、落ち着かせる。

「歩けないんでしょ？ だから送ってあげようかって言ってるの」彼の無邪気な微笑みに、思わず顔を背けるシェリル。このまま見入ってしまったら、虜になってしまう。実際そのせいで、彼女は過去に一度、心に傷を負わされている。もう、二度と傷つきたくない。傷つけられるのが怖い。その強い思いが、彼女を男たちから遠ざけてきた。友達はいても、恋心を抱く相手はいない。

しかし、今この状況では、彼の力を借りざるを得ない。早く帰宅しなければ、面倒を見てくれるおばさんに迷惑が掛かってしまう。自分の本心と、現状を冷静に分析する考えとの葛藤の後、彼女は小さく、お願いしますと呟くように口にした。

人の歩くことのない、彼らの通り道。大小、形状さまざまの屋根の上を、自分と同じくらいの年ごろの少女を抱えた青年が、跳ねるように渡っていく。少女は再認識した。自分を抱える藍眼の青年は、人知を超えた存在であることを。同時に、その青年の気紛れで自分が生きていることを。

「あ、あの青い屋根の家です」

少女が自分の家の屋根を見つけ、指差した。青年はニコリと笑っ

て承知すると、その方角へ跳んだ。あの質素な部屋から出て、三十秒後の出来事。

「ここでもいいのかい？」

家の前に降り立ち、シェリルへと尋ねる。彼女は小さくうなずき、早く降ろしてほしいと目で訴える。こんなところを知り合いに見られたら、変な噂が立つに違いない。それだけは避けたい。それが彼女の考えだった。

「また、会いにくるよ」

ドアノブに手を掛けたシェリルに、レンがそう言葉をかける。彼女は目を丸くして振り返った。明るく柔らかく、深く黒く、意地悪に微笑む青年を視界に収める。

「君はもう、僕のものだ。その証は君の首にある」

笑って言う青年。全身から血の気が引く少女。端から見れば、幽霊でも見ているかのような少女の視線。シェリルはゆっくりと、意識が飛ぶ前に、彼に襲われたところを触る。右側の首筋に、二つのザラついた感触。彼女はそれを確認すると、さらに顔を青白くした。「簡単に言えば、君は僕の家畜。君の生命いのちはとてもおいしいからね。とっておかないと勿体ない」

レンはそういうと彼女に背を向け、屋根の上へと消えていく。残されたシェリルは、侮辱感と恐怖心、そして、支配されるということに対する軽い快感の狭間で揺れていた。頭を軽く二、三度振り、マズスティックな考えを振り切った。平静を装い、ドアノブを捻る。「ただいま」

「あらゝおかえりなさい！」

シェリルが家に入ると、途端に声が聞こえてきた。妙に高い声を発したのは、シェリルの親戚筋にあたる、ハンナという女性である。彼女は夫に先立たれ、二人いた息子も独り立ちしたため、一人暮らしをしていた。息子達が僅かながらに仕送りをしてくるので、生活には困ってはいなかった。そんなある日に、親族であるタカミヤ家が、幼い娘を一人残して他界したことを、親族を集めた葬式で知り、

彼女の保護役を買って出た。そして今の生活があるのだった。

「ごめんなさいハンナさん、ちよつと寄り道しちゃって……」

シェリルは言い訳をしつつ、時計を確認した。針は七時半を指している。ちなみに、あの現場に居合わせたのは二時半である。シェリルは申し訳なさそうに居間に入るが、ハンナはニコニコとした顔で迎える。

「いいのよシェリルちゃん。今頃の年なら、ちよつとくらい遅れて帰ってくるのが当たり前なのよ。お腹空いたでしょ？ 待っててね、今温めるから」

おばさんが若い頃は。シェリルちゃんももうそんな年ごろか。色々としそうに喋るハンナ。しかし、シェリルはその話をほとんど聞いてはいなかった。思い出される、深緑色の髪と藍眼。危険で、深い瞳。甘い言葉。

「シェリルちゃん、どうしたの？」

ハンナの一言に我に返る。ハンナは不思議そうに顔を覗き込んでいた。なんでもない、大丈夫。シェリルはそう言つて、テーブルの上に置かれた箸を手に持ち、手を合わせて、いただきますと料理に手を付ける。年ごろの女の子はそんなもの。ハンナはそう割り切り、深くは追求しなかった。

シェリルは湯ぶねに浸かり、右首筋を軽くなぞる。二つのザラついた感触。レンの歯の跡。これは、彼の家畜であるという証。それを再認識すると、涙が出た。なんでこんな事に……。流れる涙を拭く替わりに、湯ぶねに頭を沈める。このまま死んでしまおうかとも思ったが、その選択肢を選ぶ勇氣はなかった。湯ぶねから顔を出し、再び涙を流した。

静かに動きだす混乱、狂うように、誠実に進む

「おっはよー！」

通学路を歩いていると、友達であるエリスが声をかけてきた。シエリルは、あ、うんと短く答える。その友人の異状に、エリスは敏感に反応した。

「どーしたどーした？ 元気ないぞー？」

エリスはシエリルの正面に回り込むと、満面の笑顔で顔を覗き込んだ。その一瞬のシエリルの表情は、何かに取り憑かれているかと思われるほど暗かっただろう。だが彼女は、親友が覗き込んでくるのを察知し、笑顔を作った。先程の暗さを微塵も感じさせない、普段どおりの笑顔を。

「別に。なんでもないよ」

いつもの調子で言葉を返す。エリスも笑顔を返し、最近のファッションの話などで盛り上がった。何もかわらないいつもの風景。しかし、シエリルだけは昨日とは違う存在となっていることを、誰一人として知るものはいなかった。

教室に辿り着くと、偶然というのか案の定というのか、昨日の怪事件の話で持ちきりだった。あちこちから想像や仮定、恐れおののく話し声が聞こえてくる。

シエリルは耳を塞ぎたかった。話を聞けば聞くほど、昨日の映像が頭の中で再生されていたからだ。ひからびた死体。その中に立つ青年。彼は迫り、そして……。それを振り切るかのごとく、シエリルはカバンを自分の机の横のフックに引っ掛け、教室を出た。その様子を啞然と見つめていたエリスは、思い出したかのようにカバンを自分の机に置き、急ぎ足でシエリルを追い掛けた。

「シエリル。シェーリール！ やっぱ今朝から変だよ！」

基本的にいつでも開け放たれている図書室に、シェリルの姿はあった。エリスはシェリルのすぐ隣の椅子を引っ張りだし、座る。シェリルは友人の問い掛けに、適当な返事を返しつつ、あの記憶を封印しようとしていた。

「でさ……あ、チャイム！ はやく教室戻らなきゃ！」

「あ、うん」

脱線しまった話は、予鈴によって途切れた。元気よく立ち上がったエリスに続き、シェリルも立ち上がる。その時、背後に視線を感じ、振り返った。しかし、その視線の先は、壁一面の窓ガラスだけだった。

「まさか、ね」

右首筋を撫で、エリスの後を追った。

放課後。シェリルは部活などに所属していないため、帰宅の路についている。教室でたむろう女子も居るが、彼女等の輪に加わることはできずと言っているほどに男子達からデートの誘いが来るのだ。それも、同学年から先輩、果ては卒業した先輩からもわざわざ誘いが来るのだった。

シェリルはそれほどの美貌を備えているわけではない。友達に言わせれば、『中の上くらい』だそうだ。そんな彼女だが、なぜか男子達の気を引いている。たまに町で絡まれることもある。仕舞いには、ストーカーに付け狙われたこともしばしば。そのため、あまり人には関わらないようにしている。

「そのオネーサン」

またか。シェリルはうんざりしつつ、振り返る。そこには、口元を下品に歪めた、茶髪の男が立っていた。シェリルは胸が高鳴った。そこら辺のチンピラとは違う、ナイフの切っ先のような雰囲気を感じている。危険な香り。シェリルは誘惑を振り切る。

「な、なんの用ですか？」

体よく断ろう。そう思い、色々なシチュエーションを立てていた彼女の思考を、男は一瞬で真っ白に吹き飛ばした。

「おいシそうダ。その生命、俺にクレ」

シェリルの反応は、遅れる。我に返ると、一目散に逃げた。

男はそれを確認し、口元を限界まで釣り上げると、皮膚がみるみる変色していく。標準的な肌色から、鉄と土の中間のような、泥色の色へ変わった。そして頭部は、西洋の物語に出てきそうな、羊の角が生えた怪物へと変形した。背中からは翼が生え、骨盤辺りから尻尾が伸びる。服は紙のように裂け、地面に落ちた。

デーモン。表現するならば、その言葉がふさわしい。それは翼を広げ、シェリル目がけて飛んだ。

後ろからはばたく音が聞こえてくる。それも、車のようにあつという間に追い付く。頭上を通ったと思ったら、目の前に怪物が立ちふさがった。シェリルは止まる勢いで、その場に強く腰を打った。視線を上げると、怪物。足が竦んで立ち上がれない。なんとか動かし、後退る。

「ウマそうナニンゲン。ヨコセ、生命よコセ！」

小枝をへし折るかのような音を立て、怪物の牙が肥大化する。その大きさは、シェリルの腕と同じほどになっていた。あんなのに噛まれたら……。シェリルは首筋の跡を思い出し、その何十倍の太さの牙を見て、青ざめた。噛まれるどころじゃない、食い千切られる！

「フグハアア……」

怪物からは、もはや言葉は紡がれなかった。彼女の頭を軽く包み込めそうなほど大きな手で、彼女の小さな肩を固定し、無造作に牙を振り下ろした。生命が吸えればそれでいい。怪物の考えを悟ったシェリルは、深く固く目を閉じた。

しかし、次の瞬間。炸裂音と共に、彼女の肩を固定していた手が離れ、瞬時に爆音が起きた。シェリルは何事かと、ゆっくりと瞼を開くと、視界に深緑の髪が映った。レンは軽く微笑むと、堀にクレ

ーターを作った怪物を見据える。

「グガアア！ キサマワ、シューきゃくゾクカ！」

怪物はレンの姿を捕らえると、憎悪の念を込めて言葉を放った。

「おノレ、カとうしゅゾクガ！」

怪物は体を起こし、翼を広げ、レンに飛び掛かる。しかし、怪物がレンに届くことはなかった。ジャラリと金属の擦れる音がしたあと、怪物の上に人が降ってきた。

「人間の言葉をまともに話せないお前のほうが、俺は下等だと思っ
ぜ？」

怪物の上には、アクセサリーとして全身に鎖をたれ下げた青年が座っていた。怪物のほうは、青年から逃れようとあがいているが、不思議と青年から解放されない。

「レン、殺っちまうていいのか？」

青年がそう聞くと、レンは軽く頷いた。それを了承だと受けた青年は、怪物の両肩と骨盤を打ち砕き、動きを封じた。怪物は悲痛な金切り声を上げたため、シェリルは耳を塞いだ。

青年は怪物の体を仰向けにした。

「生命が欲しいんだろ？ 俺はやさしいからな、最後に飲ませてやるよ。お前自信のを、な！」

言い終わると同時に、青年の腕が怪物の胸に突き刺さる。そして、何かを掴んで抜き取った。その手には、赤く脈打つものが握られており、脈を打つ度に血を辺りに撒き散らしている。

「ほら、よ！」

壮絶な悲鳴を上げている怪物の口に、手に握った心臓をねじ込ませた。吹き出す血が、怪物の頭を赤く染めていく。

青年は笑いながら立ち上がり、怪物の下顎を蹴り砕く。顎と一緒に心臓も潰れ、怪物は苦悶のうちに絶命した。死んだ怪物は早くも腐食し始め、十秒と経たずに骨のみとなった。

啞然とその様子を眺めていたシェリルを、レンが後ろから抱擁する。

「大丈夫だったかい？」

やさしく耳元でささやく。しかし彼女には、それを意に返すほどの心の余裕がなかった。突然襲い掛かってきた怪物。レンが来て、怪物は死んだ。そして、私はどうなる？ ただでは済まないだろうと、シエリルは息を呑む。

「はーん。そいつが、お前の言ってた『生命が美味しい人間』か。確かにうまそうな感じだな」

鎖をジャラリと鳴らし、青年は彼女の前にしゃがみこむ。シエリルは必死に後ろに逃れようとするが、後ろにはレンがいる。

「そうだ、シエリルに紹介しなきゃね。こいつはンケドウ。僕の親友」

ンケドウと紹介された青年は、軽く手を挙げて挨拶した。レンはシエリルを両腕に抱える。

「とりあえず、ここはまだ安全じゃない。ひとまず僕の家に行こう」
えっ、とシエリルが気付いた頃には、すでに屋根の上だった。レンの後ろを見ると、ンケドウが続いている。さらに後ろの空には……。

「なに、あれ……」

見たこともないような光景が、いや、“現象”が広がっていた

「尖兵のいくつかが、消されたようだな」

薄暗い空間。どこからともなく光が照らす。その空間の中心に、巨大な椅子が設けられている。その椅子には、誰も座ってはいない。代わりに、軽く紫色の靄がかかっている。

「どうやら、思ったよりも早く蹴脚族シュウキョクゾクの奴らが潜んでいたようです」
椅子の前にひざまずく者がいった。その者は、背中に大きく黒い翼を生やし、太く長い尻尾を持っていた。頭は人間に近く、違う箇所は、口が頬の半分近くまで裂けている点だけだ。

「まあよい。予定が少しだけ早まっただけだ。だが、念は押さんと

な。尖兵の投入数を増やし、あいての出方を伺え」

はっ！ と了承した後、ひざまずいていた者は姿を消した。残された椅子から、不気味なまでに気配が発せられていた。

「何者も、我の邪魔をすることなど、できはしない」

どこからともなく声が響き、次には高笑いに変わった。薄暗い空間には、その声だけが響いている。

静かに動きだす混乱、狂うように、誠実に進む（後書き）

いまさらながらに言い忘れましたが、生命は「いのち」と、生命力は「ちから」と読んでいただければ幸いです

そこにある現実、事実、すべて闇への渡し綱

火を入られたストーブは、肌寒い十一月の空気を暖めていく。パキパキツと音を立てて燃えるストーブは、今時珍しい薪ストーブだ。

相変わらず質素な部屋の中に三人はいた。レンは椅子に座り、手紙を滑らかに書いている。ンケドゥは部屋の中を行ったり来たりしている。時々思い出したようにナイフを取り出し、軽く指の上で回したあと、元のポケットへ戻す。

シェリルは一人、窓に張り付き、遠くの空に見える“現象”を見つめていた。

「……あれ、なんなの？」

シェリルは外を見たまま、レンへと問い掛ける。レンは静かに筆を滑らせている。

「……あれは、断層さ。空間のな」

沈黙に耐えかねたンケドゥが口を開く。シェリルは窓の外を見ながら、ンケドゥの言葉に耳を傾ける。

「断層？」

「ああ。俺たちヴァンパイアの住む『魔界』って呼ばれる場所と、この『現世』を直結させる、言わば空間の裂け目だ」

ンケドゥの言葉に、思わず振り返るシェリル。聞いたことはある。魔界という場所のことを。しかしそれは、小学生の時に読んだ絵本で見ただけだ。実際にあるとは思いもしなかった。

「普通なら、自然にできるものじゃないが、今はちよつとした事情で開いてる」

気になる一言。彼は言った後に、しまったという顔をしたが、後の祭り。

「ちよつとした事情って？」

不安げな表情で尋ねるシェリル。ンケドゥは苦虫を噛んだような

顔をし、いや、ちょっとな、まあ、などと曖昧に誤魔化す。シエリルがさらに問いただそうと窓から離れたとき、レンが立ち上がった。「隠し通せるものじゃないし、隠したからってどうにかなるものでもないしね。君には教えておこうか」

レンはおもむろにシエリルに近付き、窓の外の“断層”を眺めた。「まずは、僕らがなんなのかってところから始めなきゃね。簡単に言くと、僕はヴァンパイア」

すでに大体の検討を付けていたシエリルは驚きはしなかった。彼女の無反応さに落胆を覚えつつ、レンは続ける。

「そして、そのヴァンパイアの中にも二つの種族がある。僕らみたいに人間に近い姿をしているのが蹴脚族。さつき君を襲ったのは翼翔族^{ショウソク}。羽を生やした不様な種族さ」

彼は嘲るように微笑む。その笑みに吸い込まれそうになるシエリル。

「で、その二つの種族は今、戦争状態にある。その原因は、簡単に言くと餌の取り合いさ」

レンは軽く言ってみせたが、シエリルはその言葉の真意を理解し、硬直した。

「つまり、あなたたちヴァンパイアの狙いは、この世界の人間なわけね」

「早い話、そういうこと。魔界じゃ食料不足でね、新しい『牧場』が必要だったのさ」

レンはさも当たり前のように話す。シエリルは底知れぬ怒りを感じつつ、話を聞く。

「でも、蹴脚族も翼翔族も、仲良く食料を分け合う気なんかさらさらなくてね。我先にと断層を開こうとしたんだ。だけど、先に開いたのは翼翔族だった」

空間の断層を睨みながら、レンはつぶやくように言った。競争に負けた。ただそれだけの表情だった。

「まあ、僕らも小さな断層は開けたしね。五、六人くらいこっちに

これたけど」

レンは気を取り直すようにそう言うと、突然シェリルを抱え上げた。彼女はきゅっと軽く悲鳴を上げ驚く。

「家まで送るよ。また翼翔族に出会わないとも限らないしね」

彼女は断ろうとはしない。またあんな怪物に会うなど、二度とこめんだからだ。レンは軽く微笑むと、ンケドウが開け放った窓から飛び出た。その後にンケドウも続く。

浴槽に張られた湯が少しばかり溢れだす。

首まで浸かりながら、彼女は一息ため息を吐く。今日聞いた話を反芻はんすうすると、鬱になる。この町の間人間が、いや、世界中の人たちが、ヴァンパイアに餌として飼われる。今の自分のように。

視線を正面の壁に向けていると、意識がゆっくりと沈んでいく。

シェリルは抵抗せず、沈みゆく意識に身を任せた

不思議な色の空間。紫にも橙色にも、藍にも紺にも見える。その中を漂う。誰かが自分を抱えているかもしれない。何かに包まれている気がする。

「ココから先に、君の人生がある。幸せかもしれない。辛いかもしれない。でもそれはオレの管轄外だ。その先は自分で切り開くんだぜ」

そうして、放された。

空間を漂い、わずかに後ろが見えた。そこに男の姿があり、手を振っている。

「幸せに、なれ」

そして、光に飲まれた

気が付くと、ハンナが顔を覗き込んでいた。

「大丈夫シエリルちゃん!?」

血相を変え、まるでシエリルが死にかけたかのように慌てている。彼女には過保護な面もあり、シエリルは少々気を使ってしまうのだった。

「ん……ハンナさん、大丈夫だよ」

微笑みかけてはみても、ハンナは次々と話し掛け、口癖かのように『大丈夫?』と聞いてくる。シエリルは大丈夫と諭し、彼女の気をなんとか鎮め、おやすみなさいと最後に言って自分の部屋へと迎う。

ハンナは最後まで心配そうにしていたが、シエリルが部屋に入つたのを確認し、後味悪そうに自室へと戻っていく。

「あの夢、なんなんだろ」

誰に言うでもなく、空に言葉を投げ掛ける。ベッドに滑り込み布団を被る。頭を巡るのは、風呂場で見たあの夢。夢にしては妙に現実味を帯びており、ついさっき体験したかのようにだった。不思議に思いながらも、甘い眠気の誘惑に瞼を閉じた。

「あ……あ……」

月の光と街灯に照らされた路上。そこで一人の女性の生命が吹き消された。女性を抱えていた怪物は、それをゴミか何かかのように放り投げた。

口元を腕で乱暴に拭い、女性のものである血液を拭き取った。

「フ、フフ……」

怪物は次の獲物を探そうと、人間の姿に化け、近くの角を適当に曲がった。するとすぐ正面に、茶色掛かったショートヘアの二十代くらいの女性が歩いてきた。

しめたと思い、何気ない顔で女性へと近付く。

「こんばんわ、きれいなお姉さん」

「あらこんばんわ」

何気ない笑顔であいさつし、女性からも笑顔で返された。人間へと化した怪物は、声を上げられないように食事するために、すれ違いざまに女性の背面に回った。

「うふふ、今日はラッキーね」

女性は静かにつぶやき、振り返った。怪物は別に焦る様子もなく、女性に近付いていく。女性はにっこりと笑い、怪物は体に、特に胸に強い衝撃が走った。怪物の表情が凍り付く。

「二人もヴァンパイアに会えるなんてね」

女性は天使のような可愛らしい笑顔を見せる。怪物にはそれは、悪魔の笑みにしか見えなかった。

視線を落すと、女性のか細い腕が自分の胸に突き刺さっている。その細い腕は、一気に引き抜かれた。

「うふふ、いただきます」

笑顔で、手に握った怪物の心臓を食い千切る。

怪物は痛みに叫ぼうとしたが、声が出ない。代わりに、喉から血が泡を伴って、ゴポゴポと吹き出てきた。女性はいつのまにか怪物の喉を抉^{えぐ}っていた。

怪物が苦しみ悶え、女性は食事を終えた。壮絶な表情を張りつかせたまま、怪物は一気に腐食し、骨のみと化した。

「ご馳走様でした。この子は羽が生えてたから、さっきの子の仲間じゃなさそうね」

うれしそうに笑う女性。手を舐め回し、付着した血痕を拭き取り、口の周りはハンカチで拭った。ハンカチをバッグに戻し、歩き去る。路上は再び静寂に支配された。

「……」

レンとンケドウは、足元に転がる人骨を見下ろしている。静かな路地裏、体液を抜かれた死体が二つと、人骨が一人分。

「まさか、翼翔族の仕業か？」

ンケドゥは人骨を拾い上げ、まじまじと眺める。残り香からすると、女か。確か、ジユリーだったか。彼は人骨を地面に戻す。

「……いや、違うな」

ンケドゥの一連の動作を観察したあと、口を開いた。

「正面から心臓に一撃。翼翔族相手ならこんなあっさりとやられたりはしないはずさ。だから、別のやつ」

レンは冷静に分析したあと、きびすを返して歩きだす。ンケドゥは合掌し、レンの後を追った。

「また一人、尖兵が殺されました」

立派な造りの椅子の前、ひざまずく者の姿があった。椅子には相変わらず霧がかかっている。

「どうやら、蹴脚族以外の生物にやられたようです」

ひざまずく者の報告を受け、霧は首を捻った（ように見えた）。

「現世の生物が、か？ 興味深い。調べさせろ」

はっと了承の声を上げた後、ひざまずく者は消えた。空間の明かりが徐々に暗くなっていき、椅子の姿が闇に飲まれていく。

「たとえそれがなんであろうとも、我の邪魔をするほどのものでもないだろうが」

つぶやきを残し、椅子は完全に見えなくなった。

世界は動きだす、ただ、望まぬ方向に

シェリルは思い描いていた。もし、世界がこのままヴァンパイア達の『牧場』になってしまったら。それは許せない。そう言葉が浮かび、自分に驚いた。

少し前、レンに会う前だったら、素敵だと考えたかもしれない。いや、考えたらう。変わったかも。シェリルは内心、笑った。

「シェーリル！ なーににやにやしてんの？」

いつのまにか正面に座っていた友人が、顔を覗き込んできた。シェリルは微笑んだまま、指で顔を押し返す。ついでに爪を立てたため、エリスは額をさする。

「うーん、なんてゆーか、変わった？」

エリスの意外な一言にシェリルは驚く。

「なんかさ、笑い方に影がないっていうか……とりあえず明るくなつたかな、うん」

エリスは言い終わると同時に立ち上がり、机を挟んで正面にいるシェリルの手を掴む。

「よし、今日は門限ギリギリまで放さないわよ」

笑顔で言い放つと、シェリルのことなどお構いなしに手を掴んだままカフェを後にする。引きずられる形で歩くシェリルの顔は、以前ほど作られたものではなかった。

人通りの少ない道。塀と塀の間を縫うように張られた道は、車一台が通るのがやっとの幅しかない。

レンは歩いていた。今朝から妙な胸騒ぎがする。

『ちよつと気になることがあるから、調べてくる』と言って、昨日の夜から帰ってこない親友。朝は必ず朝食を食べにくるのにな。レンの心には、時間が経つにつれ不安が積もる。

昨日の夜、あの白骨を見た。同じヴァンパイアの仲間。あれを見た後のンケドウの失踪。不安がレンを急ぎ足にする。

「ンケドウ……死んでるなよ」

とうとう、屋根の上に飛び上がる。翼翔族に見つかるかもしれない。そうなれば面倒だ。だが彼は、その危険性を踏まえたうえで跳ぶ。

「あら、どうしたの？ そんなに怯えちゃって」

茶色掛かったショートヘアの髪の下で、笑顔が振りまかれる。その笑顔は、端から見れば天使のよう。しかし、正面の当事者にしてみれば、悪魔の微笑み。

レンにも来てもらったほうがよかったかな。ああ、そういや、レンの作った卵焼き、食べ損ねたな。

「なあ、美人なお姉さん。あんたはいったい何者なんだ？」

満身創痍のンケドウは尋ねた。彼は立つのもやっとなんとかのうに、壁に寄り掛かっている。

女性は、美人と言われたのがうれしかったのか、笑ってみせる。

「そうね……簡単に言ったら、人食い狼さんかしら」

女性は笑いながら近づく。右腕はボディを狙っているのか、小脇に構えている。ンケドウの頭に、親と友人、そして、無二の親友の顔が流れた。フツと軽く嘲笑い、覚悟を決めて目を閉じる。

気を付けるよ、レン

女性が腕を打ち出そうとしたまさにその時。なにかの気配を察知し、女性は後ろに跳び退く。

彼女は突如降ってきた“なにか”を見た。それは地面に突き刺さ

った腕を引きぬき、その深い藍眼で、女性のほうを睨み付けている。ンケドウが異変に気付き、目を明けると、深緑の髪が目に入った。「レン!？」

彼は驚いた後、カカツと独特な笑い声を上げた。

「怒ってんのか？ 珍しいな。最近短気になってきたんじゃないか?」

ンケドウが冷やかすと、レンは振り返らずに立ち上がる。目は女性を睨み付けたまま、口の端が持ち上がる。

「お前だって、そんなにやれるなんてな。らしくないんじゃないか?」

違いねえ。ンケドウは笑った後、地面に崩れ落ちた。レンはンケドウが気を失ったのを確認するために一瞬振り返り、再び女性を睨み付ける。

しばらく、静かな時間が流れる。

「……恐い顔しちゃって。可愛い顔が台無しよ？ きみ」

先に沈黙を破ったのは女性だった。笑いかけてはみたが、油断はできない。笑顔は自然ときこちなくなる。

再び沈黙。睨み合いが続く。そして、動いた。

やはり先に動いたのは女性だった。普通の人間なら肉眼では追えない動き。女性の姿は一瞬消えた。しかし、レンは人間ではない。女性の動きはある程度見えている。

軽い炸裂音。レンの胸を貫こうとしていた女性の腕を、彼は手首を掴んで阻止した。そのまま壁に向かって、力一杯叩きつける。

しかし、女性は壁に着地していた。そのまま、衝撃を緩和するために曲げた膝を伸ばし、レンに飛び掛かる。レンは女性の手を放し、背筋を反らせて地面に手を突き、足で弧を描いて後方に着地する。

「あら、やるじゃない」

そういいながら、指先に付着した血を舐めとる女性。レンの胸元がわずかに裂けていた。

両者の睨み合いは、あっけなく終了した。女性が急に背を向けた

のだ。

「やーめた。こんなつまらないことで顔に傷がついたら損だしね」
手をひらひらとさせ、歩き去る女性。レンは構えを解き、ンケド
ウの元にしゃがみこみ、背にかかえた。

「私はカナエ。あなたと二度と会わないことを祈るわ、レン君」
そう言い残し、角へと消えていく女性。レンはしばらくその方角
を睨んだあと、逆方向へ歩きだした。

建物の屋根、気配を完全に殺して傍観していた翼翔族。レンがい
なくなつたのを確認した後、翼を広げて飛び去った。

「ただいまー」

日も落ちて、暗くなりかける春先。肌寒い空気と共にドアをくぐ
るシェリル。

ドアを閉め、靴を脱ぎはじめたところで違和感を感じた。返事が、
ない。

「ハンナ、さん？」

留守なのかな？ でも、明かりもついてるし、鍵もかかってなか
ったし。

シェリルは明かりのついている部屋、リビングへと向かう。

闇は確実に動きだした。あとは、果てまで行くのみ。まだ、始
まったばかり。これは今までの終わりであり、これからの始まりで
ある。混濁の闇という、“これから”の

「ハ……ハンナさ……」

ハンナは、いた。しかし、シェリルの見知った姿では無かった。
肌の色は青白く、牛蒡じゆんごのように細くデコボコな四肢。その顔は、恐
怖と驚愕を張りつけたまま、ひからびていた。

「ハンナさ、ん……そんな……」

そして、その後ろには、まるでシェリルが来るのを待っていたかのようにテーブルに座っている怪物。

怪物は、飛び込んできた獲物の悲しみと恐怖を湛えた表情を満喫し、ゆっくりとテーブルから降りる。

「マッてたゾ、ムスめ。おまエの生命、うまいらしいカラな」

ゆっくりと彼女に迫る。シェリルは後ろへと下がる。この時彼女は、昨日みた夢を、何故か思い出していた。

彼女の光、闇に交わり、虚へと還る

外は雨が降りだした。割れて吹き抜けになった窓から、水滴が地面を叩く音が聞こえてくる。春の冷たい雨。

室内で見つめ合う二つの人影。片方は恐怖を、もう片方は嬉々とした表情をしている。

「あんシンし口。イタイのはいつシユンダけダ」

前にも似たようなセリフを聞いたが、その時以上に恐怖感に包まれている。

心が無意識にレンを思い浮べる。助けて。想像上の彼に声をかけるが、無論助けなどはこない。なら……。シエリルは左に跳んだ。すぐ近くには階段がある。

後方から、壁を粉碎して追い掛けてくる音が聞こえてくる。彼女は死に物狂いで階段を駆け上がった。幸い、階段の幅は狭く、翼翔族のヴァンパイアの巨体ではそう簡単に昇ることはできない。やはり、壁を粉碎する音が聞こえてきた。

シエリルは階段を昇り終えると、自分の部屋へ駆け込み戸を閉めた。すぐに窓に駆け寄り開け放つ。冷たい空気と滴が体に打ち付ける。いつのまにか豪雨と化しており、彼女の全身を一瞬にして水浸しにした。

シエリルは窓の下を見て、一瞬戸惑った。ここは二階。逃げ込んだはいいいけど、飛び降りるのは難しいかな。そう考えていると、後方のドアが碎け散った。その音が、彼女のすべての考えを白紙にし、窓の外へと飛び出させた。

重力に引かれる体。着地のことなど考えずに飛び出してしまったため、体は多少後ろに傾いていた。しまったな……。一秒の間に、シエリルは後悔の言葉を脳裏に浮かべ、足には強い衝撃と激痛が走る。

悲鳴を上げそうになった。意識も飛びそうだった。しかし、後ろ

からの恐怖がそれらを許さなかった。地面に手を突き、起き上がる
うとするシェリル。しかし、右足が明後日の方向を向いており、動
かすと激痛が走るのだった。

なんとか這いずって逃げ出そうとしたが、後ろに羽音と着地音を
聞き、諦めた。

（助けて……レン！）

後方から迫り来る足音に、祈るように思い続ける。そして、足音
がピタリと止まり、生暖かい液体を背中全体に浴びた。

「な……二……」

悲鳴に近い、ヴァンパイアの声。シェリルが何かと振り返ると、
胸から赤く脈打つ臓器が飛び出したヴァンパイアがいた。その臓器
から放たれている液体で、シェリルの全身が赤く染まっていく。顔
だけは、飛び散る血液は微量しか付着しなかった。

「おいしそうな匂いがしたから来てみたら、先客がいたなんてね」
その声の主は、ヴァンパイアの心臓を握った腕を引き抜き、立ち
すくむヴァンパイアを、邪魔だと言わんばかりに放り投げた。その
後、手に握った心臓を完食する。

「あな、たは……だ……れ」

シェリルは、激痛とショックにより、深い闇へと沈んでいった。
薄れ行く視界に、女性の天使のような微笑みを捉えた

「う、ん……」

白く柔らかなベッドの上で目を覚ました。シェリルは朦朧とする
頭で、何があったかを思い出そうとした。

右足が痛い。両腕が頭の上のほうで縛られてる。体が濡れてる。
入ってくる情報は、自分の現状を知るのには不十分だった。唯一思
い出されたことは、ヴァンパイアに襲われ、何者かに助けられた、
ということだけ。

「あら、気が付いたの」

まだ覚醒しきっていない頭に女性の声が響く。その方向に頭を向けると、天使のような微笑みを浮かべる女性がいた。綺麗な人だな。シェリルはふとそう思った。

女性はどうかやら湯上がりらしく、ハンドタオルで髪を拭っていた。タオルを肩の上に落とすと、茶色がかった髪が、湿気を帯びて艶やかに光を受けていた。

シェリルが虚ろに女性を見つめていると、女性はタオルを近くの椅子の背もたれに掛け、シェリルへと近づく。そして、彼女を縛り付けているベッドに上がった。

「本当においしそう。さすがは“異世界人”ね」

シェリルに体を被せながらそう言った。シェリルはその一言に驚きを隠せなかった。

「異世界、人？」

言葉の意味を理解できなかった。いや、正確には心が拒絶したのかもしれない、理解することを。そして、その意味を受け入れることを。

自分のなかの何かが崩れるような気がした。だから、信じたくはなかったし、理解したくもなかった。別のものに対する言葉だと思いたかった。

だが、女性は悪戯に笑う。

「あら、自分が何者なのか知らないの？」

……やめて。

「じゃあ、お姉さんが教えてあげる」

やめて、やめて！ 聞きたくない聞きたくない！

「あなたは別の世界から来た人間なのよ。ずっと昔にも、あなたみたいな異世界人に会ったことがあるから、間違いないわ」

シェリルのなかで、信じていたかった何かが崩れた。瞳からは一瞬にして光が失われ、口が力なく開いている。

しかし、女性はシェリルの変化に気付きはしなかった。視線はすでに胸元に移されていた。左手の指は、なだらかな胸のラインを辿る。

「ふふふ……まずは心臓から、ね。心臓は体の中で一番美しい臓器よね」

うつとりとした表情で右手を構える。しかし、その声はシェリルの耳には届かず、動作は目に映らなかった。

ただ、幼い頃に見た父と母の笑う顔が、モノクロ写真のように脳裏に焼き付いているだけだった。

その時、突如扉が吹き飛び、それと同時に窓が砕け散った。女性とシェリルしかいなかった部屋に、二人の男が乗り込んできた。

「……あー、面倒臭え。管轄外だっつーの」

扉を蹴破って入ってきた男は、部屋の中を一瞥してつぶやく。男は、黒のトレンチコートに指の露出したグローブ、右手に銀剣、左手に銀銃という異様な格好で、やわらかに殺気を放っている。

窓から侵入してきた男は、深緑の髪に藍眼。レンである。無言、無表情のまま、静かに鋭い殺気を放つ。

部屋の中は、張り詰めた空気に支配されている。誰一人として動かない。それぞれ出方をうかがっていた。

「あら、その深緑君、また会ったわね」

喋った瞬間、女性のほうに何かが飛んだ。一瞬後、シェリルの上にレンがいて、女性はレンのいた位置にいた。

「カナエさん、だったね。残念だね、祈りが通じなくて」

口調は柔らかだが、鋭さがあつた。敵意をむき出しにした瞳は、深い青色に染まっていた。蹴脚族の眼は、その時に持っている一番強い感情によって、わずかに色が変わる。

「あら、覚えててくれたの。お姉さん、うれしいわ」

語尾に行くにつれ、棒読みになっていく。カナエとしては、最上

級の獲物を横取りされたのだから、非常に不愉快だった。

不意に一発の銃声が鳴り響いた。二人が驚いて扉のほうを向くと、男が手にした銀銃を天井に放っていた。

「おい化け物共。その辺にしといて、さっさと俺の前から消えてくれねえか。二人相手は面倒だが、出来ねえわけじゃねえ」

男の言葉は、身に纏った雰囲気裏付けしていた。カナエは膝を突いた状態から立ち上がると、男のほうに向かって歩いた。

「ここ、あたしの家なんだけど」

「そうか……じゃ、さっさと用事を済ませたら返してやるよ」

何とも間の抜けた会話がなされた。しかし、カナエがここで男を襲わないのは、今の自分の力の程を知った上で、この男の力には及ばないことを悟ったからだ。

「……あなた、おいしそう。今度、頭からじっくり味わってあげる」

男の脇を通り過ぎる際に、カナエは言い残した。男は苦笑いし、カナエの足音が遠ざかったのを確認したあと、レンを睨み付ける。

「おまえも出ていくんだぜ？ ああ、その娘は置いていけ」

男の言葉に、レンはシェリルを抱き寄せた。その行動には、ただ獲物をとられまいとするもの以外の感情も見取れた。

「……心配すんな、盗りはしないし殺もしない。事と次第によっちゃあ、二度とは近付けさせないかもしれないけどな」

男は銃を向けながら言い放った。レンはしぶしぶシェリルを解放すると、その光を失った瞳と表情を見て、不安に襲われた。

……シェリル……。レンはベッドから降りると、男のほうに向かって二歩進んだ。自分の射程範囲に男を捉えるためだ。

「僕はここに残る。シェリルは僕のものだからね。君がシェリルに変なことをしないか、見張らせてもらうよ」

「ご自由に。そう言うとな男はベッドに歩み寄る。レンは、瞬きも惜しいといわんばかりに男を観察する。」

男はシェリルの脇に座り、その上体を助け起こした。彼女は、何かの脱け殻かのように口を半開きにし、目は虚空を見つめている。

「……あー、シェリルだったか？ 大丈夫か？」

揺すり、呼び掛けるが、彼女からの応答はなかった。ため息を吐き、ベッドから立ち上がる。

「カウンセリングは本っ当に管轄外だ。おい、緑」

男がレンに向かって呼び掛ける。レンは一瞬、自分が呼ばれたとは思わず、呆然とした。男の言葉を理解すると、不機嫌そうに顔を逸らせる。

「僕にはレンっていう名前がある。緑じゃない」

不機嫌な応えに、思わず吹き出す男。そして、すぐにレンを招き寄せた。

レンが男の傍まで行くと、男は肩を叩いてきた。

「この娘を任せる。本当は俺の仕事なんだが、管轄外の事までは手が回せねえ。おまえにならこの娘を委ねても大丈夫そうだ」

それだけ言い残すと、男はさっさと来た道を引き返す。残されたレンは、男の気配が遠ざかったすぐあとにシェリルの隣に座った。

彼女の顔を覗くと、虚ろな瞳で空を見つめていた。まるで人形かのように生氣を感じられなかった。

「シェリル……」

レンが呼び掛けると、彼女はゆっくりと振り返り、レンと目を合わせた。

この目には、見覚えがある。そうだ、昔の……僕。彼は今のシェリルに、昔の自分を重ね合わせた。すべてに裏切られたと思っていた、昔の自分に。

「レン……」

ぽつりと、呟いた。シェリルの目に涙が滲み始め、次第に粒となり、頬を伝った。二粒、三粒と数は増え、彼女はレンの胸にしがみついた。

「レン……私、別の世界の人間なの？ じゃあ、お父さんとお母さんは、私の本当のお父さんとお母さんじゃないの！？」

シェリルは堰を切ったかのように喋りだし、もはや泣き叫ぶに近

かった。

「ハンナさんも他人なの！？ 今までの私はなんだったの！？ なんてこんな……」

もはや脈絡も無くなってくると、シェリルは急に静かになった。

彼女の鳴咽だけが静かに部屋に響いた。

ただ呆然と肩を掴んでいたレンは、不意に彼女をやさしく包んだ。彼女はそれを意に返す様子はなかったが。

「レン……私、もう……なにがなんだかわからなくなってきた。……殺して……私を、殺して……殺してえ！」

シェリル自身、なにを言ってるのかもわかっていなかっただろう。ただ、その叫びは悲しみを帯びていた。

悲痛な叫びを耳に受けながら、レンは彼女の首筋にやさしく口付けをし、彼女の意識を遠くへと導いた。

新たな味方、姿見えずとも、彼女の強き支え

薄暗い空間。その中心に設置された巨大な椅子。今は何もない。

「……」

翼翔族が一体、その椅子の前に舞い降りた。着地すると同時に、膝をつく。

「バルド様は居られますか？」

丁重に尋ねると、椅子の影から、一回りほど大きな翼翔族があらわれた。しかし、その大きな翼翔族でも椅子の座面に頭が届くか届かないかほどだった。

「バルド様は現在休まれておられる。私が代わりに受けよう」

大きな翼翔族のヴァンパイアは、膝をついた翼翔族の前に立つ。

「はっ、スウイス様。尖兵を襲っていた謎の勢力の正体突き止めました」

ヴァンパイアがそう言うと、スウイスと呼ばれたヴァンパイアが興味深そうな表情をした。

「そうか。……報告せよ」

「はっ！ 謎の勢力の正体ですが、『人狼』と呼ばれる種族のようです。個体の戦闘能力は、尖兵の下級兵を上回っていますが、おそらく中級程ではないでしょう。今のところ、一体のみ確認しています」

ヴァンパイアが報告を終えるとスウイスは後ろに振り返る。

「その人狼、捕獲できるか？」

お任せを。スウイスの言葉に承知し、一礼してからヴァンパイアは飛び去った。

スウイスは一人、椅子を見上げた。

「バルド様、ご趣味が悪いですね。いつから居られたのですか」
彼がそう言うと、椅子から笑い声が響き、紫の霧が湧き出た。その霧はひとしきり笑うと、静かに渦を巻き、椅子に腰を掛けた。

「すまぬ。話の間に割り込むのは趣味ではないのだな」

二人は軽く笑うと、互いに姿を消した。そして、その空間は照明を落とすように、徐々に暗くなっていった。

「ねえねえお父さん、見て見て！」

まるでお伽話に出てくるようなドレスをはためかせ、可愛い少女が踊るように回った。それを見た父は微笑み、手を打つ。

「可愛いよシエリル。でも……」

父はそこで言い淀む。後ろから来た母も、父と同じような表情を見せる。

少女は二人の表情を見比べ、疑問符を浮かべる。

「なに？」

「髪は長いほうがいい」

夫婦同時に同じことを言い、少女は不機嫌になった。

「シエリルは短いほうがいいの！ いいもん、短くても似合っつて言われるまで着てるから！」

少女は不機嫌顔で断言し、両親は笑った。少女の不機嫌顔は両親に感化され、次第に笑顔になっていった。

幸せそうな三人家族の笑い声が、響いていた

それが、ただの幻想だったの？

真っ暗な空間で、自分に問い掛ける。

みんなで笑っていたけど、私は違う存在だった。一緒じゃなかった。

シェリルは塞ぎ込んでいた。何かが壊れそうな、あるいは壊れたような気がして。

『血の繋がりが、そんなに大事か？』

不意に、耳に響いた。

大事よ。言葉の主は答えてみた。言葉の主が、笑ったような気がした。

『ワシはそうは思わんな』

そうなのかな。静かにシェリルは思った。

血の繋がりが、か。

わかっていた。そんなものは目に見える繋がりでしかない。しかし、シェリル自身の心が、それを求めてしまった。血の繋がりが以上に深い繋がりがあつたにも関わらず。

いつのまにか、心が癒されていた。亀裂が生じていたはずの場所には、今までの思い出がある。父と、母の。

あなたはだれ？ 問い掛けると、見えない誰かは一瞬考えた。

『そうじゃな。強いて言うならワシは だ。おまえの心が壊れそうになったとき、命の危機に面したとき、いつでも助けてやる。それがワシの仕事だ』

名前の部分だけ、飛んでいた。やがて、聞きなおす間もなく意識が引き戻された。

目が覚めると、レンの部屋だった。質素だが清潔感のある部屋。

ここ最近何度か来たが、不思議と落ち着く場所になっている。さすがに外が暖かいたため、薪ストーブに火は入っていないかった。

体を起こしてみると、手足に力が入らないことに気が付いた。前にも経験したこの感じは、レンに吸血されたときのそれだ。シェリルは倦怠感に襲われながらも上体を起こす。

しばらくベッドの上で眠っていると、ドアが開いた。

「あ、起きてた？ 待ってて、朝ご飯作るから」

ドアの隙間から姿を見せたレンは、可愛い色合いのエプロンを付けていた。角の丸いエプロンの左端には、くまのアップリケまでしてあった。

ドアが閉まり、足音が遠ざかったところで、シェリルは思わず吹き出した。普段の彼の雰囲気とマッチしたエプロン。不思議と馴染んでいた。

クスクスと笑っていたら、窓からンケドウが入ってきた。

「……何笑ってんだ？」

「べ、別に。あなたこそ、どこから入ってきてるのよ」

言ってから気がついた。自分が敬語で話していないことに。だが、いまさら気にしようとも思わなかった。

「別に。いつものことだし」

彼はそう言ったあと慣れた手つきで、部屋の隅に置かれていた中折れ式のテーブルと折畳みの椅子を、部屋の真ん中に設置した。少し大きめのテーブルに、椅子が三脚。

ンケドウは椅子に腰掛け、テーブルに肘を置いている。背筋は相変わらず曲がっていた。シェリルも椅子に座ろうと、フラフラと立ち上がってテーブルに向かった。椅子を引き、座る。

「……なあ、レンのこと、どう思ってる？」

ンケドウが唐突に口を開き、出てきた言葉にドキリとするシェリル。

「な、何？ いきなり、どう思ってる、なんて」

どう思ってるもなにも、私は……。

「レンは、惚れてるみたいだな。おまえに」

その言葉に、再びドキリとする。顔が紅くなっていくのが自分でもわかった。ンケドウは別の方向を向いており、彼女の表情の変化は見えていなかった。

「ダチの勘ってやつだ」

別に尋ねてもいないのに、そう付け足す。言い終わるのと同時に、ドアがノックされた。ンケドゥは立ち上がり、ドアへ向かう。

シェリルは、気持ちを落ち着けるために深呼吸をした。なんとか紅潮は押さえることができ、レンが料理を乗せた盆を持って入ってきたとき、普段の表情を作り上げることができた。

「さあ、食べよ」

レンの持った盆から、おいしそうな香りが漂う。

時は正午過ぎ。空には三、地には二の追っ手がいる。

しつこい。もう三体は潰したのに、まだ向かってくるの？ カナエは息を荒くしつつ、後方を確認する。空と地から、五体のヴァンパイアが追跡してくる。

いっそ、玉砕覚悟で戦ってみようかしら。馬鹿らしくて自分で笑ってしまった。

「しつこいわね……」

家と家の間をくぐり、塀を越え、裏路地に逃げ込み、廃屋を通る。だが、追っ手は振り払えない。通り過ぎざまに通行人を襲って体力を回復しながら、どこまでも追跡してくる。一方のカナエは、体力回復など走りながら出来るものでもなく、いよいよ持って追い詰められてきた。

「さすがに……はあ、きついわね」

これが、狩られる側の気持ちか。カナエは半分自嘲気味にほほ笑み、前に回り込んできた一体のヴァンパイアの胸を貫いた。

「しぶといヤツダ。ダが、ジカんのモンダいだ」

案外、その時間は早くやってきた。ヴァンパイアが二体先回りし、待ち伏せをしていた。カナエはその二体の胸を貫いたが、地面に打ち撒かれた血に足を取られてしまう。

「くあつ！？ しまつ……」

一瞬後、複数のヴァンパイアに取り押さえられ、五体全ての自由

を奪われた。最後まで抵抗しようと体を擦り、コンクリートさえも粉碎するほどの腕力で拘束を抜けようとする。が、脇腹に三、四発の鋭い蹴りを受け、押し黙った。

「テイコウはむダだ。おとナシクつかマツている」

正面にしゃがみこんだヴァンパイアがそう告げる。彼女は脇腹の痛みと悔しさで濡れた瞳で強く睨み付ける。その眼が気に入らなかったのか、正面のヴァンパイアは顔を強く殴り付けた。

「……フン、ツレていけ」

カナエを取り押さえていたヴァンパイア達は立ち上がり、羽をばたつかせて飛び立とうとした、その時。すぐ隣の廃屋の壁が、爆破でもされたかのように吹き飛び、破片が取り押さえていたヴァンパイア達に直撃した。その場にいたものすべてが驚愕し、廃屋のなかに浮かび上がる人影を見た。

ジャラリ。大きく金属の擦れる音が鳴り、不器用に崩れた穴からンケドウが出てくる。そして、近くにいるカナエの驚いた表情を見て、次にヴァンパイア達を見た。

「カッカッカ……。救世主様登場だ」

一言そう言くと、修羅がとり憑いた。驚愕して動きの止まっていた、カナエを拘束していた三体の翼翔族を、風が通り過ぎたかのように引きちぎった。手足がゴロンと地面に落ち、辺りに血の雨が降り注ぐ。体は原型を留めないほどに潰された。

リーダー格の翼翔族は、一瞬の内に起こった出来事に恐怖し、その場を逃げ出す。もう一体も遅れてあとを追おうとしたが、叶うことはなかった。ほんの少しの間、背を向けた。次の瞬間には、頭は中空で乱回転し、地面と激しく出会った。

「……カッカ！ 不様だなあ」

首が落ち、苦しそうにあえぐ体と、体から落ちて悶え苦しむ頭。二つを見比べて笑ったあと、ンケドウは心臓を潰した。ふっとカナエに振り返り、歩み寄る。カナエは、彼が以前の復讐に来たんじゃないかと思い、身構える。

ンケドウが手をのばす。まだまともに体が動かせないカナエは覚悟し、目を瞑る。

「なにやってんだ？ さっさと掴めよ」

その言葉に目を開き、ンケドウの顔を確認する。顔には、血塗られたやさしい微笑みがあった。カナエは体の緊張を解き、ンケドウの手に掴まって立ち上がる。

「おめー、結構弱いんだな。下級の奴らにあんなに追い詰められてよ」

ンケドウはからかうように笑った。カナエはそれが何となく気に食わなかった。

「それよりあなた、あんなに強かったわけ？　なんで私の時に……」
カナエの言葉を、ンケドウが無言で遮った。彼は柄にもなく咳払いし、自分の開けた穴の方に視線を移した。

「あー、その……また襲われないとも限らんしよ。どうだ、家くらいまでなら送ってやるよ」

頬を真っ赤にそめ、言い放つ。その不器用さに思わず吹き出すカナエ。しばらく笑ったあと、ンケドウの隣に並んだ。

「変な男ね。殺されかけた相手を誘うの？」

ほっとけ。そういうンケドウだが、幸せそうに笑っていた。

彼はめずらしく、背筋を伸ばして歩いた。

優しき友、静かな一日、嵐の前の最後のもの

静かな一日。本当に静かな一日だった。翼翔族は、めずらしく姿を見せなかった。

「どうおもうよ？」

赤褐色の髪と髭が特徴的な蹴脚族が尋ねた。尋ねられた本人は難しそうな顔をして空を見上げた。

「やつら、いよいよもって戦争を始める気だな。やれやれ、管轄外な仕事ばかりだ」

黒いコートをなびかせ、男は屋根から飛び降りる。着地したそこには女子高生がおり、上から人が降ってきたことに驚いた。男は気にする様子もなく立ち上がると、少し足を引きずりながら歩きだした。

「さて、今日一日が明日にどう反映するか……」

いつも通りに授業を受けている。ついこの間、ハンナが死んだ。全身の血が抜かれた死体を警察はもう見慣れており、またか、といった様子で事後処理をしていた。

シェリルもそんな死体は、見慣れたというほどでもないが慣れていた。しかし、親しい人物の死は、重い。

「シェリル……その、さ、お昼ご飯、一緒に食べよ？ ね？」

エリスが自分の弁当を手を持ち、開いたシェリルの隣の席に座る。シェリルは聞こえていないかのように、自分の弁当を開く。弁当の中身は、レンの手作りの料理が詰まっていた。

周りが騒がしい中、二人の少女は静かに弁当を食べる。

「……あの、さ」

沈黙に耐えられず、エリスが口を開く。

「あたしなんかじゃ役不足かも知ないけど、私はシェリルの友達

だよ？ 辛いのはわかるけど、元気出さなきゃ、ね？」

エリスが明るく笑いかけるが、この時シェリルは別のことを考えていた。

もし、エリスや、学校みんなまで死んでしまったら

考えるだけで身が震えた。エリスの顔を直視できない。どうしても、ハンナのミイラ顔と重なってしまふ。胸が潰れるほどに苦しくなり、呼吸が乱れる。涙も出そうになる。ハンナの時にいなかった感情が、出そうになる。

エリスは、そんな友達の異変に気が付いた。

「シェリル……」

顔を覗き込み絶句した。彼女の顔は、苦しみや悲しみ、憤りなどや、エリスではわからないような感情がすべて入り乱れた表情をしていた。エリス自身も、そんな表情を見て気持ち沈んだ。

シェリルの、馬鹿。

エリスは立ち上がり、シェリルの腕をつかんで強引に教室を出た。
「エリ、ス？」

泣きそうな声を押さえ、シェリルは友達の顔を覗いた。しかし、エリスの表情をうかがうことはできなかった。ただ、シェリルの見た後ろ姿は、エリスの悲しみを教えてくれている。

しばらく廊下を歩き、階段を登ると、扉が目の前に現われた。普段生徒達は使わない屋上に通じる出入口。エリスは扉を開き、屋上に出た。無言で屋上の真ん中に移動する。

後方で扉が閉まる音がした。シェリルはそれを、顔面に温もりを感じながら聞いた。エリスが、シェリルの頭を抱擁している。

「お馬鹿のシェリル！ そんなに辛いなら、吐き出しちゃいなよ。中に溜めたまんまだったら、潰れちゃうよ……」

最後のほうは、霞んで聞こえた。エリスも泣きだしそうになっているのだろう。

暖かった。エリスの胸は柔らかくシェリルを包み、神経を研ぎ澄ませば、鼓動が聞こえそうだった。そしてシェリルは、記憶の奥

底にある母の柔らかさ、暖かさ、優しさを思い出した。

辛かったでしょう、シェリル……。泣いていいのよ

幻聴かのように、頭のなかに母の声が響いた。それと同時に、溜め込んだものが一気に溢れてくる。

「……………うあああああ！」

叫んだ。力一杯に叫んだ。それでもまだ叫び足りなかった。涙も溢れたが、目が小さいことが恨めしくなるほどに足りない。自分のすべてが足りなかった。内のすべてを吐き出すには。だから、喉が張り裂けんばかりに何度も叫び、涙を滝のように流した。

何事かと集まった生徒達を押し退け、屋上に入ろうとした男性教師を、女性教師は制する。

今の屋上は、二人だけの空間。誰も踏み入ることは許されない。

「……………エリス……………ありが、とう……………」

叫んだ反動で声がしゃがれる。シェリルは暖かさを求め、今だにエリスにすぎる。

「いいっていいって！ あたしのシェリルちゃんが苦しんでる時は、あたしも苦しいんだから。それに、溜め込むと余計に辛くなるだけだしね」

エリスの優しい言葉に、シェリルは頷いた。気が付けば、もう午後の授業は始まっている。

……………まあ、いつか。

エリスは、子供のように温もりを求めてくるシェリルの頭を撫でながら、小さくつぶやいた。

日も沈んだ中、質素な部屋の中に奇妙な顔触れが揃った。レン、

ンケドウ、そして見知らぬ二人の蹴脚族。カナエ。そして、黒いコート
の男と、シェリル。

部屋の中が、少し狭く感じられた。

「……なんで獣人族のお嬢さんが居るのか不思議なんだが。誰か説明してくれんかね？」

男が問い掛ける。反応したのはンケドウ。

「いや、まあ、わけありだ。それより、あんたこそ誰だい？ 名前も聞いてねえし、素性が知れねえ」

ンケドウの質問に、男は笑った。

「じゃあまずは、この縄を解いてくれ」

そう言っ、椅子に縛られた自分の体を顎で指す。それに対し、レンが首を横に振った。男は肩を落とし、ため息を吐く。

「……俺はルイス。職業は探偵。調べんのが得意だが、副業で護衛やら異端狩りやらやってる。本当は管轄外なんだがな。ちなみにこの世界の人間じゃない。そっちの嬢ちゃんと同じ世界の人間だ」

最後の言葉に、シェリルが反応する。問い掛けようとしたがしかし、ンケドウが遮る。

「わかった。んじゃ、ここに集めた理由を簡単に説明する。……近いうち、翼翔族との戦争になる。んで、今こつちの世界にいる対抗戦力は、シェリルを除いた、ここの全員だ」

ンケドウの言いたいことを、全員が理解した。ンケドウはこのメンバーで、翼翔族を迎え撃とうと言うのだ。

「……なんで俺まで？ 俺は関係ないだろ。管轄外だつつの……」

コートの男、ルイスはつぶやいた。
「使えるものは何でも使うのさ。協力してくんねーなら、今ここで死んでもらうぜ？」

その言葉と同時に、ンケドウの脇にいたヴァンパイアの一人が、ルイスの後方に回った。鋭い犬歯をむき出しにし、ルイスに見せ付ける。

「……拒否権なし、か」

つまりは了承。ルイスの縄は解かれた。

「とりあえず、死ななでくれよ、みんな。増援が来るまでな」
ンケドゥはそう言いつと、解散を合図した。

シェリルがぼうつと窓の外の断層を見てみると、ルイスが隣に立った。

「シェリル、だったか？ 俺の相棒の調子はどうだ？」

シェリルは何を聞かれたのか理解できなかった。その表情を読み取ったのか、ルイスは苦笑いをする。

「名前はまだなのか。仕方ないな。まあ、その内解るさ」

ルイスはシェリルの肩を叩き、部屋を立ち去る。シェリルは結局、ルイスの言葉の意味を知ることとはできなかった。

星が空一面を覆っている。ハンナが死亡してから、あの家には戻っていない。レンの部屋から見える星空を、シェリルは静かに見上げていた。

そのうち、レンが部屋に戻ってきた。深緑の髪は艶やかに静かに、質量を増している。

「……お風呂空いたよ」

シェリルは小さくうなずき、机の上に置いてあったバスタオルをすくい上げた。そのまま部屋を出る。

レンは閉まりゆくドアを見つめていた。

守るよ、絶対。僕が守るから

失うもの、大きすぎ、ただ悲しみに沈む

薄暗い空間に設けられた巨大な椅子。その前方に、なんの序列もなく、ヴァンパイア達がひしめく。

「……行け」

発せられたのは、その破壊の一言。大小様々なヴァンパイア達は、あるいは地を歩き、あるいは空を渡る。

薄暗い空間には、椅子と大型のヴァンパイア一人が残っていた。

「判断が早すぎたのでは？」

スウィスは心配事を口にする。彼にとっては、未だ調査が行き届いてない部分が不安材料である。特に、『生命が美味しい少女』の得体が知れていないのが、だ。

しかしバルドは軽く笑っただけ。

「スウィスよ、我らにとつての障害は、たかだか数人の蹴脚族と獣人だけだ。人間など、何人束になろうと怖くはない」

果たしてそうだろうか。言い知れぬ不安がスウィスを襲う。

「いざとなればお前がいる。頼りにしてるぞ」

「は。必ずやご期待にそつてみせましょう」

不安を振り切れたわけではないが。

「公園の中は、春一色に染まっています。花の香りが心地いいです」
公園の真ん中でTVの中継が行われていた。春の訪れを視聴者達に知らせるために。明るい笑顔で語る女性アナウンサーが、狙われた。

「これから桜はピークをむかえ、きゃあ！」

カメラの画面から、アナウンサーが消えた。その次の瞬間、数人の悲鳴が聞こえ、カメラが旋回する。映されたのは、アナウンサーの果てた姿と、それに牙を突き立てる、異様な生物。次にはカメラ

が横倒しになり、放送が途絶える。

騒然となる町。次には混沌。我先にと、あてもなく走りだす人々。ヴァンパイアは次第に数を増し、人々を襲う。

逃げる少女。ショートヘアーのその髪はエリスのものだ。必死に走る。呼吸はすでに荒くなっており、汗が玉になってとめどなく流れ落ちる。

つい先ほど、軽い買い物を終えて帰宅した。しかし、家に向かう最後の曲がり角を曲がって、買い物袋を滑り落とした。家のまわりを飛びかう、コウモリのような怪人。その内の一体は、弟だったものを抱えていた。

今思うと、見間違えたかもしれない。しかし、今はそれどころではない。後ろから笑い声が聞こえてくる。自分の逃げる姿を笑う声。屈辱感を感じ、悔しさに涙が滲んだ。

しかし、走るしかない。もしかしたら、助かるかも知れない。淡い希望が、彼女を走らせた。

シェリルは走る。その後ろにはレンが続く。

シェリルは急いでいた。この緊急事態に、友人が心配で。レンに頼み込み、ついてきてもらった。友人を助けるために。

エリス、無事でいて

シェリルは友人の家へと急ぐ。上空から次々に襲ってくるヴァンパイアは、レンが蹴散らしている。

ふと、足元が暗くなる。上を見ると、ヴァンパイアが一匹、自分に襲い掛かってくる。レンが討ち盛らしたのだ。

「しまった、シェリル！」

跳ぶが、間に合わない。シェリルは足がもつれて転倒し、そのまま覚悟して目を閉じた。

銃声。ふと目を開くと、黒いコートが目に入った。

「危険だ、どつかに隠れてな！ 防衛戦は管轄外だ！」

ルイスが背を向けながら怒鳴る。その間にも銃声は絶えなかった。
「ダメ、隠れてなんかいられない。エリスが……私の親友が心配なの！」

シェリルは自分の意志を強調した。正直、構っている暇がないルイスだったが。“依頼”の件もあり、無言でシェリルを助け起こした。

「じゃあ、さつさと助けるぞ」

シェリルは強く頷き、震える足で再び走りだした。

前をルイスが、後ろをレンが守る形になった。ヴァンパイア達は休む暇なく襲い掛かってくるが、一匹としてシェリルに触れることは叶わなかった。

次の角に差し掛かったとき、先に角についたルイスの表情が強ばった。

「シェリル、あいつのことか？」

シェリルもすぐにルイスの隣に並び、その姿を確認した。その走る姿は、間違いなくエリスのものだった。

「エリス！」

シェリルが喜びの声を上げると同時に、その時は訪れた。

「もう、アキた」

たったそれだけ。たったそれだけの理由で、エリスは

「あふっ……」

軽いおかしな悲鳴。急降下したヴァンパイアは、エリスを四肢で捕らえ牙を突き立て、一気に腹を満たす。

「……えあ……」

シェリルは、頭の中で何かが崩れる音を聞いた。友人が目の前で干からびていく。

とっさの判断で、ルイスがヴァンパイアの頭を打ち抜いた。シェリルはすぐにエリスの下に駆け寄った。

抱き起こすと、人間とは思えない軽さ。顔を見ると、驚愕した表情が張りついていた。

ついさっきまで、生きてたエリス。そして今腕の中にあるのは、そのエリス“だった”死体。

「……エリ、ス……」

涙も出なかった。失ったものが大きすぎて、悲しみを越えた無の境地に、シェリルは一人たたずんでいた。ルイスもレンも、痛ましく思い、近づけなかった。その一瞬だけ、油断していた。

「ガアああああ！」

頭の半分が砕けたヴァンパイアが、残ったわずかな脳の司令に従い、悲しみに沈むシェリルに襲い掛かる。

「しまっ！」

レンが駆け出し、ルイスが銃を構えるが、どうしても間に合わないのは明白だった。

シェリルはこの時、時間が止まったかのような感覚に見舞われた。

『契約を執行する。我が名を呼ぶがいい』

……誰？

『ワシだよ、だ。思い出すのだ。ワシは近くにいます。ずっと前から……出会う前からおまえは知っているはずだ』

……知らないよ、知らない……。

『心を研ぎ澄ませ。そして聞け。最初に聞こえた言葉が、ワシの名だ。さあ、呼べ！そしておまえに仇なす闇を打ち払うのだ！』

……あ……聞こえる。あなたは

『契約執行！ ハイド！』

低い声とシェリルの声。同時に二つの声が響き、強力な光が発生した。

「……やつと思い出したか」

ルイスは眩しさに視界を奪われながらも、笑みを浮かべた。レンとルイスの視界が戻り、最初に見た光景は、白銀に煌めく諸刃の剣。その先端に突き刺さる歪な生物。

突き刺されたヴァンパイアは、短い断末魔の悲鳴を上げ、ゆつくりと灰塵となっていく。レンは呆然とし、ルイスは満足そうに微笑んでいる。

ヴァンパイアが完全に消滅すると、シェリルは自分が出現させた剣に驚く前に、親友の亡骸を抱き抱えた。

「エリス……エリス……」

涙は出ず、しかし悲しみの言葉は延々と紡がれる。亡骸を抱き抱えたまま、シェリルは動かなかった。

レンとルイスは、そんな痛ましいシェリルの背を見るのも辛く、空を見上げた。鳥のようにはびこっていたヴァンパイア達が、なんと一匹もその姿を確認できなくなっていた。

「やつら、引いたのか？」

ルイスは怪異に思ったが、結局、翼翔族の考えは読めなかった。辺りには、シェリルの嗚咽のみが響いている。

「おお、あれだ。あの光こそ、我が探し求めていたものだ」

バルドは断層の隙間から見えた“聖なる光”を、まるでシヨーケース越しにオモチャを見る子供のように仰ぎ見ていた。

しかしスويسには、その光は見ていて気持ちのいいものではない、むしろ自分たちにとっては有害な輝きだった。その証拠に、光の発生した付近のヴァンパイア達は、光に当てられ退却した。しざるを得なかった。

それほどの光を前にして、バルドはそれを欲している。今まで付き従ってきたスويسですら、その心中を覗くことは叶わなかった。「スويس、一度体制を立て直し、再度攻勢の準備をしる。次はリ

「ダークラスのものも出すのだ。あの光をもつ少女を、私の下へ連れてくるのだ」

バルドの目には、狂気にも似た喜びの光が灯っていた。 스위スは初めて、バルドに恐怖心を抱いた。

「どうした、返事は？」

はっ、と頭を軽く下げる。バルドの姿はすでに霧散していた。

起きる手折れた花、強き意識、強大な闇の魔の手

「……」

シェリルはただ静かに、庭の塀のそばに立てられた大きめの石の前に座り込んでいた。その瞳は、その石を映しているかどうかすらもわからない。

この石は、母親代わりだったハンナと、親友のエリスを弔うための慰安碑のつもり。下にはエリスが永遠の眠りに就いている。

埋没作業の最中も、シェリルは終始無言、無表情でいた。シヨックが大きすぎたのか、今の彼女は感情というものが欠落しているようにも見える。

その後ろ姿があまりにも痛々しく、哀愁を漂わせている。レンはその姿を窓越しに、哀しみの目で見つめていた。

「……ふう」

レンの隣でため息を吐き、ルイスは奥へと消えていった。レンだけが一人、月明かりに照らされて立っている。

シェリルは、石の前に座り込み、ハンナやエリスと一緒に過ごしてきた日々を思い返していた。辛いときは励ましてくれ、楽しいときは一緒に笑ってくれた二人。

シェリルが純潔を奪われそうになった時、エリスは必死になって闘ってくれた。淋しい時は、いつも一緒にいてくれた。

小さな頃、一人で泣いていたら、ハンナは優しく抱きしめてくれた。悪いことをしたときは、親身になって叱ってくれた。いつか、どうして私のお母さんとお父さんは死んだのかと聞いた時、ハンナは悲しそうな顔をして、シェリルを抱き締めた。二人で、泣いた。

「……ハンナさん……エリス……」

二人の名前を呼ぶのは、もう何度目になるかわからない。涙は果てて、流れはしない。喉は潤され、声が枯れることもない。ただ、心だけが乾いていく。いつかはこの悲しみも乗り越えられるだろう

が、そんな時間もない。

心の中でハイドが語り掛けるが、彼女はどこ吹く風、とでも言うように反応しない。

不意に背中に温かさを感じた。振り返らなくてもわかる、レンだ。「レン、これから、どうすればいいかな……」

聞いたって無駄なのはなんとなくわかっていた。でも聞かずにはいられなかった。彼の温もりに、必死にしがみつく。それに答えるように、彼もまた彼女を強く抱きしめる。壊れそうだから、壊れないよう、優しく強く。

しばらくは静かな時間が流れた。世界には、風はなく、虫の鳴く声すらない。シェリルの嗚咽のみ、微かに耳に入る。二人の世界の、唯一の音。

「……わたし……私も、戦う」

彼女は静かに口にした。言葉の一つ一つを噛み締めるように、ゆっくりと。

「ダメだ、危険だよ」

彼女の耳元で彼は囁く。否定の意を持つその言葉には、不思議と肯定的に響いた。そしてシェリルは決意した。新たに手にした『ハイド』の力で、レン達と共に戦うことを。

その決意は、決して親友や育ての親を失ったために、自暴自棄になったからではない。自分自身の中の、よくわからないけじめを着けるためだ。

レンに抱かれるシェリルの目には、復讐や憎悪といった薄黒い闇の炎ではなく、使命感などからくる太陽のような煌めきを帯びた、オレンジの炎が灯っていた。彼女は今、守られるだけの存在から、傷つきながらも前へと進む強い存在となった。

「そうら、来たぜ」

全員が集まったシェリルの家の屋根の上、ンケドゥがそう言った。

全員の視線の先に、屋根という屋根を、雀が飛ぶかのように跳んでくる蹴脚族。その全てがシェリルの家の周りに集まった。

「偉くなつたもんだな、ンケドウ」

蹴脚族が一人、ンケドウに声を掛けた。ンケドウは満面の笑みを浮かべて返事にした。次の瞬間には、真顔に戻っていたが。

「いいかお前ら、やつら翼翔族なんかに敗けんじゃねえぞ！　ここが踏ん張り時だ！　ここで敗けりや、蹴脚族の滅亡めうじつだと思え！」

ンケドウの叫びに応えるように、一斉に喚声が上がった。そして、反対側の空が黒く染まり始めた。小さな点が無数に発生し、絵具で塗り潰すかのように染めていく。

全員がそれぞれの決意を胸に固く結び、黒く染まっていく空を睨み付けていた。

シェリル達は蹴脚族の兵士達と共に、敵の発生源、つまり空に見えている巨大な断層へと向かっていった。空を覆い尽くすほどの翼翔族は、その爪を牙を剥き出し襲い掛かってくる。しかしそこは歴戦の兵士達。無傷とはいかないまでも重傷を負うことなく返り討ちにしていく。

「この調子で行けば、案外楽勝かもな」

ンケドウが呟いた。戦局はこちらが優勢で、さらに、点々とだが小さな断層を開いてやってくる援軍もあとを断たない。しかし敵もまた、一向にその数を減らしてはいない。空を覆い尽くす黒はまだ、小さな粒を降らせながらも空を隠したままだ。零れる光は、翼翔族の皮膚に反射して赤黒い。

「……固まったら結構まずいな。何チームかにわかれようぜ！」
ンケドウが唐突に叫んだ。確かに、これだけの数を相手にする際に固まっていたら、それぞれの戦闘能力が封じられてしまう。ンケドウの指示に従い、それぞれ四、五人に分かれて解散した。

シェリルは羽毛のような軽さのハイドを振り回し、襲いくる翼翔

族を灰塵に返していく。その後方で相棒の銃の引き金をひっきりなしに引き続けるルイスがいる。前方には凄まじい破壊力で翼翔族を叩き潰していくレンがいる。

彼らは誰よりも速く、一直線に断層へと向かっていった。たとえ何十匹もの下級翼翔族が襲い掛かっても、足止め程度にもならなかった。誰よりも速く、誰よりも強く、誰よりも真つ直ぐな三人。地面に降りてきた黒い塊を半分に分けるほどの勢いだ。

「……あれか」

空の上で、スウィスが三人を見下ろしていた。三人の下に向かい、ゆっくりと降下していく。周りに上級翼翔族を七匹ほど従えて。

一瞬、後ろから襲い掛かる翼翔族に対応するために振り向いたルイス。その瞬間背後から強い衝撃を受け、地面を二、三度転がり受け身をとった。

「クソッ、なんだ?!」

起き上がり前をみた瞬間、背中に冷水を浴びたかのような倒錯を受けた。翼翔族の間に見えたのは、二、三匹に取り押さえられたレント、シェリルの前に立つ大きな翼翔族の姿。

視界はすぐに、下級翼翔族達によって遮られた。

「……退け、雑魚共があ!」

愛銃を手当たり次第に、しかし正確に翼翔族の胸に向けて乱射した。

シェリルは声が出なかった。目の前に立つ巨体から放たれる殺気によって、全身の筋肉すべてが行動を抑制されていた。こちらを睨む眼から視線を外すことができない。

「シェリルといったか? 我々の下へ来てもらっ」

スウィスが言い終わると同時に上級翼翔族が二匹、シェリルの体を取り押さえ、飛び立った。あまりの早さに、悲鳴を盛らしたのが上空にあがってからになった。

はるか下のほうから、レンが吠えるのが聞こえた。下をみると、

数多の翼翔族を薙ぎ倒しながら追跡してくるレンが見えたが、すぐに後ろに流れていった。シェリルは一人、断層へ向かって連れていかれている。

「……！ 放して、放して！」

思い出したように抵抗をしたが、腕は固定されて全く動かせず、足をばたつかせるのみだった。そのうち強い衝撃を受け、後頭部の痛みを感じながら、意識は深い闇へと沈んでいった。

「……ふっ」

小さくため息をこぼし、レンのあとを追ったために飛び立とうとした瞬間、後方から地面の欠片が飛来した。直撃すれば頭蓋骨を粉碎するであろうその欠片を、丸太のように太く強靱な尻尾で粉碎する。面倒くさそうに振り返ると、ショートヘアの女性と黒コートの男が立っていて、その後方には白骨と化した翼翔族達が転がっていた。

再び面倒くさそうにため息を吐くと、体をそちらに向けた。

「あなたけっこう悪そうだから、シェリルちゃんには近付けさせないわよ」

人差し指を突き付け、スウィスを睨むカナエ。隣に立つルイスは銃口をスウィスの胸に向ける。殺気をその身に纏い、相手を睨み付ける二人。スウィスだけが、面倒くさそうな余裕の表情でいた。

ルイスとカナエは、全身で相手の強さを感じようとしていたが、その無意味さを知ることとなった。探りを入れれば入れるほど、感じれば感じるほど相手の中へと飲み込まれていく。

底無し。二人の出した結論だ。冷や汗が顎頬を伝い、顎から落ちる。全身が栗立ち、寒気がする。すべて恐怖からくるものだ。二人の様子が、スウィスの強さを物語っているようにも見える。

「力の差は歴然。それでも、向かってくるか？」

スウィスは最後の警告、とでもいうように、一文字一文字に重み

を持たせて言う。

「……愚問！」

一発の銃声が、響いた。足止め程度になるだろう戦いの開戦の合図だった。

最凶の敵、最強の敵、ただひたすらに絶望

「もうすぐだ。もうじき、この力が完全に私の物となる……フ、フフツ……クハハツ」

巨大な椅子にまわりついている霧が、小刻みに笑いだす。気になって、一匹の中級翼翔族が近付くと、霧の一部が突然巨大な手の形状へと濃縮した。驚いた翼翔族はすぐに振り返り逃走を図るが、あっけなく捕らえられてしまった。

「この力が、もうすぐ……は、ははっははは！」

霧が歓喜の笑い声をあげると、手に握られていた翼翔族が一瞬にして炸裂し、角や尻尾の先などの末端部分のみが辺りに飛び散る。そしてそれらの肉片も、地に落ちる前に灰となり、消滅した。

薄暗い空間は、狂喜に包まれていた。笑い声は、絶えない。

「……フン」

スウィスが握った拳を開けると、白銀に輝く弾丸が地面に落ちた。金槌で殴られても傷すら負わない弾丸が、丸くひしゃげて転がっていた。ルイスはその様子を見て、身体中を恐怖の虫が這い回った。

クソツ、管轄外の強さだぜ。

意味をはき違えた口癖が、脳内に響く。その言葉に次いで、過去の記憶が脳裏に映る。

「……縁起でもねえ」

独り呟き、銃を乱射する。的確に頭、胸を狙うが、標的が消えた。「なんつ……！？」

頭の上で乾いた炸裂音。見上げるのと同時に、自分のすぐ横に何かが落ちた。視界には死を連想させる翼をはためかせる化け物。

ルイスは直感した。これは、人間がどうこう出来るレベルじゃない、と。気が付けば、丸太のような尻尾に弾き飛ばされ、宙を待っていた。

カナエは立ち上がると、遙か後方の川に落下したルイスを頭の片隅ですら意識せずに、再びスウィスに向かって飛び込んでいった。打ち出す拳は難なく防がれ、繰り出される拳の横薙ぎは躲すだけで風圧に体勢を崩される。

一瞬遅れた、守るための両腕の間に拳が捻じ込まれる。挟みこんでも威力はあまり相殺されず、衝突した瞬間に腹筋に力を込め、内臓へのダメージを軽減した。そのまま吹き飛びコンクリート塀を打ち砕く。

カナエはゆっくりと起き上がった。塀に衝突したのもそうだが、殴られたダメージがあまりにも高かった。

ふと彼女は近くの塀の破片を手に取り、指先に力を込めてみた。破片は豆腐でできているかのように用意に砕け散った。そこから考え出された結論が、『目の前の怪物は、自分の手には負えない』という事実だった。

「……それでも、やるしかないのよね」

先ほどのルイスのように、独り呟き構えるカナエ。普段の彼女なら、出会った時点ですでに逃げ出していただろう。拳を交わらせた今でも、逃げると本能が伝えている。それでも彼女は逃げない。理由は自分にもよくわかっていない。

だから、シエリルのためと適当な理由を自分に言い聞かせた。極上の獲物を横取りされないためだ、と。

全力で地面を蹴り、蹴った塀の欠片が地面に落ちる前にスウィスに三発拳を放ち、一発の蹴りをもらう。両手に加え左足も引つ張り上げ防ぐが、衝撃が体を突き抜け、再び塀へ激突した。その衝撃音の後、蹴りだした欠片が地面に落ちる。

土煙が彼女の姿を隠し、一瞬だけスウィスの視界から消える。スウィスは追い討ちをかけるため、大きな翼で跳んだ。距離は数メー

トルしかなかったので、土煙に彼が吸い込まれるまで本当に一瞬であつた。

彼女が倒れているであろう地点を予測し、拳を放とうとするが、予測地点に彼女の気配はなかった。なんの感情も表さないまま、視点を上に持っていく。僅かに薄れた土煙の向こう側に、大きな影が見えた。

「つたああああ!!」

気合いの入った言葉と共に、公園に配置されていたドーム状の遊具を、回転力を活かして勢い良く投げつけるカナエ。彼女は塀に衝突したとき、後方に跳ぶように受け身を取り、塀をもう一つ越えた先にあつた公園から遊具を引き抜き、回転するように上空へ跳んでいたのだつた。

スウィスは完全に意表を突かれ、驚いた様子で遊具の下敷きとなつた。地面に着地したときのカナエの顔が、人狼のものになつていた。肩で息をしながら、地面に埋まっていた部分が上を向いた遊具を見据えた。

「……気絶でもしてくれば、時間稼ぎにはなるけれど」

人狼の顔から少しずつ人の顔へと戻っていく。全力を解放すると、どうしても人の形を保つことはできない。つまり、全身全霊を込めて遊具を投げつけたのだつた。腕が悲鳴を上げる。

物音一つしないため、気絶したのかと判断し立ち去ろうとしたその瞬間、爆発でもしたのかというほどの爆音、風圧が発生した。カナエが驚きで一瞬だけひるんだ瞬間、何かが視界を覆い隠し、頭を掴まれ持ち上げられた。

「がっ、あっ!?!」

右目はその何かの隙間から、その正体を捉えた。手だ、巨大な手。視線を正面に持っていくと、目を見開き、人間をも殺せるかというほどの殺気を放つスウィスが眼に入った。

「……なかなか……フム、楽しませて……もらつたよ。これはその……ほんの礼だ」

ギリギリと締まってくる。頭全体に襲いくる圧迫感に呻き声を上げる力ナエ。その手に爪を食い込ませて殴つても、握力は少しも変わらなかった。

やがて圧迫感は痛感に代わっていき、握り潰されるというのがより鮮明に意識できるようになった頃、滲み歪んだスウイスの後ろ側、砕けた塀の欠片の上に、今最も会いたかった者の姿が見えた。

「ンケ……」

その者の名を呼ぶことは、叶わなかった。

熟れ過ぎた林檎を地面に叩き付けるといのが近い、歯切れの悪い湿った粉碎音。次には頭という司令塔を失った体が、力なく地面に倒れ伏せる。頭を失って間もないため、空気中に晒された気管は空気を取り込み続け、動脈は血を送り出し続ける。手足が短い痙攣を断続的に起こしている。

眼球、頭蓋骨、脳髓が堕ちた体に落ちる。スウイスが手を広げると、中に残っていた残骸が湿った音を立てて地面に落ちる。浴びた返り血を、彼は舐め取った。

「フム……なかなか、美味……」

スウイスは挑発するように、後方で殺気を放ち続ける蹴脚族に振り返る。

立ち尽くすンケドウは、見た光景を否定しようとはしなかった。悲しもうとも思わなかった。ただ単に、目の前の大きな翼翔族を無性に殺したくなっただけだった。拒否も悲しみも、その他諸々の感情も、すべてこの感情の後でいいと、そう考えることすら押し退けた。

殺意、憎悪。そのどちらでもあって、そのどちらよりもさらに高い感情。人はおろか、彼自身、蹴脚族、翼翔族すらこれを表す言葉を持たない。ただひたすらの、心の闇。どこまでも深く、どこまでも暗く。

「……キィイサアアマアアアアアアアアア……」

心の奥底、底無しの闇のソコから発する、闇に染まる叫び声。泣

いているようにも響くその声にも、感情を表さないスウィス。しかし次の瞬間、彼の目は驚嘆で開かれる。

ああ、あと少し。肋骨が無ければなあ。ンケドゥはそんな感想を漏らし、顔を上げる。スウィスは面白そうに口の端を持ち上げ、ンケドゥを叩き潰そうとする。

ンケドゥが消え、代わりに胸に開いた穴から血が噴出される。

「油断していたとはいえ……これほど、か。フム……」

徐々に塞がっていく穴から視線をンケドゥに合わせる。自分の体に付着した自分の血をすくい、口へ注いだ。舌で転がすように味わい、ゆっくりと飲み込む。

「なるほど。少しは、やるようだな……久々に自らの血を……味わうことになるとは」

スウィスは両手から力を抜き、構えを取った。相手に対し少し右斜めに向いて立つ姿は、ただ単に立っているようにしか見えない。

「ああ、次は殺してやるよ」

ンケドゥは殺意に満ちた目で、スウィスを睨み付けて立っていた。

最凶の敵、最強の敵、ただひたすらに絶望（後書き）

叢 剣さん、ご協力ありがとうございました！

煮えたぎる憎悪、相討つ仇、支配者の声

一陣の風が吹く。恐怖や憎悪の叫び声がいやに強く耳に響くが、それは二人からはだいたい離れた地点から聞こえてくるものだ。彼ら二人の付近には、無数の骸が転がっているだけだからだ。二人の間を、一陣の風が吹き抜けた。

ンケドウとスウィスは同時に跳んだ。二人を結ぶ線の中で、二人は一瞬だけ衝突した。一瞬ではあったが、二人はそれぞれ三発放っていた。互いの攻撃の衝撃で後方に吹き飛ぶ。発生した二つの土煙、その片方が横に破裂した。ンケドウがスウィスに向かって再び跳んだのだ。

しかし、手応えはない。スウィスはそこにはいなかった。

「やる、な。だがその程度で私を倒せるとでも？」

その声は、ゆっくりと立ち上がったンケドウの後ろから聞こえた。話し方に見下すかのような丁寧さがなくなり、代わりに本気の力が籠もっている。ンケドウはゆっくりと振り返り、拳を握って骨を鳴らした。

「まさか。まだ準備運動だぜ、こっちは。そっちこそ、この程度で勝ったと……」

瞬間、ンケドウの姿が霞み、スウィスの体が後ろにあとずさる。

「……思っなよ？」

スウィスの立っていた地点で、拳を前に突き出す格好でンケドウが呟いた。

面白い。スウィスもまたそう呟き、腹部を押さえていた拳を垂れ下げる。次には、両者とも肉眼では追いきれない攻防を繰り広げる。一進一退、微かにスウィス寄り。地面は蹴られる度に削り取られ、石は粉碎し、砂は粒子の大きさ関係なしに砂煙となる。

スウィスは飛ばされることはなかったが、ンケドウは向かう度に四方に弾かれている。ここにきてやっと、その力量の差が出始めた

ようにも見える。

「クソ……があ！」

普段のンケドウからは想像もできないほどの気迫と憎悪の込められた叫び。狂気とも取れるその叫びに共鳴するように、戦闘スタイルも崩れてきている。普段なら空いた所を的確に狙ってたたき込むが、今は闇雲に連打しているだけだ。逆に空所を突かれ、ダメージを蓄積している。

何度目、何十度目になるかわからない地面との衝突に、いよいよ膝をつき始めるンケドウ。その顔には憎悪と焦燥感が入り交じり、傷を負ったケモノそのものだった。瞳には理知的な輝きはなく、代わりに破壊衝動を具現化したようなギラつきが見て取れる。

「……そろそろ終わりにしましょうか」

スウィスはゆっくり体勢を立て直し、冷静に言った。目の前の敵からは、最初のような脅威が感じられなくなったからだ。

再び飛び掛かるうとするンケドウに対し、受け流す体勢を取り構えるスウィス。その時、ンケドウの口の端が僅かに上がった。刹那、ンケドウの腕が、今度は確かにスウィスの胸に突き刺さる。

「……なに！？」

しかし、あと寸分というところで心臓には届きはしなかった。スウィスが辛うじて突進を止めたからだ。右腕を右手で掴まれ、ンケドウは咄嗟に左手も出したが、それも左手に止められる。

しばらく力を込めて押し込もうとしたが、小さく舌打ちをしたあと、力を入れるのを止めた。

最後の手を封じられると言うことは、負けに直結している。ンケドウは自分の敗北を悟ったのだった。

「ふむ……戦闘方法を単純化して相手の油断を誘い、その油断を突くとは……見事。しかし詰めが甘かったな」

見下すかのように言い放つスウィス。恨めしげに見上げるンケドウ。今再び比べるとその身長差はすごいものだ。ゆうに三メートルはあるかもしれない。もしくは、それ以上。腕を掴まれているンケ

ドウが、地面から二、三メートル持ち上げられている。

スウィスはンケドウの腕を自分の胸から引き抜くと、その両腕をンケドウの頭上で一まとめにして左手で持つ。そして、右手を腰に添えた。

「さらばだ、勇猛な蹴脚族の戦士よ」

矛のように指を延ばした手を一気に、ンケドウの胸目がけて突き出す。瞬間に強い衝撃を受ける。

「がふっ！ この世界の、言葉で、『窮鼠猫を噛む』て……言うんだ、よ」

蹴脚族の名の由来は、翼を捨て、己の脚で飛び回ると言うことから来ていると、ヴァンパイア達の間では伝えられている。スウィスとて忘れていたわけではない。ただ、油断していたのだ、確約たる勝利の前に。

ンケドウの胸にはスウィスの太い腕が、スウィスの胸にはしなやかなンケドウの脚が、それぞれ突き刺さっている。互いの身体はゆっくりと、ほぼ同時に地面に沈む。

「み……こと……だ」

スウィスはそれだけ発すると、目を見開いたまま胸の傷口から腐食していき、十秒足らずで白骨をさらした。

ンケドウは、腐食が始まるも気力でその腐食と生命を繋ぎ止め、這いずるように移動している。

「ハア……か力、ガ……ガナ、エ……」

這いずるように進む先には、頭を失ったカナエの亡骸がある。腐食は緩慢ではあるが、徐々に身体を蝕んでいく。すでに肋骨は露出し、臓器は地面に道筋を作り出しては腐食し消滅していく。心の臓はとうの昔に消え去っている。

いよいよ肺も身体という器から零し、呼吸はおるか声も発せなくなったとき、その赤紫色の手が、カナエの手に触れた。皮膚の剥げ落ちていくその手は、しっかりと彼女の手を握った。

さよなら、またすぐ会おう。俺の短い間の恋人さん。

彼の顔は原型を止めてはいなかったが、確かに優しく笑っていた。すべての身が消失したのは、ほんの数秒後だった。

風が一陣だけ、二人を優しく包んだ。

彼女が目を覚ますと、辺りは薄暗かった。血の匂いがし、胸に重りを置かれたかのような気持ち悪さに見舞われた。

シェリルの意識が次第にはっきりしてきた。改めて辺りを見回すと、四方八方を翼の生えた化け物に取り囲まれていた。「美味そうだ。美味そうだ」とささやきながら、彼女を取り囲んでいる。急に怖くなり、ハイドをその手に召喚する。すると周りのヴァンパイア達は恐れ of 言葉を口々に、後ろに引き下がる。それを観察した後、立ち上がったシェリルに、背筋に冷水を浴びせるかのような声色の声が浴びせられる。

「待っていたぞ、シャングの小娘よ」

シェリルはゆっくりと振り返る。すると、その視界にビルのような大きさの椅子が、紫色の霧を纏って存在していた。それを直視した瞬間、あまりの覇気に呼吸すら苦しくなり、先程までは湿りすら無かった顔に、冷や汗が一筋落ちていく。

魂を直接握られたかのような圧迫感を与えるほど、その霧を纏った椅子の存在は凄まじいものだったのだ。心の中で、愛しい人物の名前が響く。

お母さん、お父さん、ハンナさん、エリス……レン。私を守って……。

ハイドが心の中で囁く。最後まで闘おうと。シェリルは今一度そ

の手に握った唯一の武器を握り直し、目の前の椅子を睨み付ける。

最後の戦いが、始まる。

強大な闇滅び、すべてが夢の跡、新たな時を歩む少女（終）（前書き）

今回は少し長めです。後書きも見えていってください。

強大な闇滅び、すべてが夢の跡、新たな時を歩む少女（終）

あまりにも大きな椅子に、座すように取り巻く紫の霧。その霧とシェリルの間には、翼翔族は一匹もない。霧に威圧され、その場から退いたのだ。

シェリルは椅子を見上げながら、剣先を少し下に向けるように構え直す。このほうが、いつ相手が仕掛けてきてもう受けやすいことがわかつている。とはいっても所詮は素人。相手の動きが素早ければ反応できはしない。シェリルは自分の敗北を薄々イメージしていた。

捕らわれ、血を吸われ、ゴミ屑のように投げ捨てられる。

そんな想像を打ち払うかのように、駆け出した。相手が仕掛けてきたら死ぬ。それならこちらから仕掛けたほうがいい。何もしないで待つよりは。

距離がグンと縮む。ハイドの力で体が軽く、筋力も普段の数倍に引き伸ばされているので、それだけの速度が出た。

あと少しで椅子に届くというところで足元が揺れた。咄嗟のことだったので、シェリルは反応出来ずに足がもつれ、派手に転がった。どうやら誰も予期していない出来事だったようで、シェリルの耳に届くほどの不安の声が、周りの翼翔族から聞こえてきた。

しばらく続いた揺れが治まると、次には何かを引き裂くような音が響き渡り、一つのイレギュラーがその空間に侵入した。

「っはあ！ …… はあ …… シェリ、ル ……」

彼女が呼ばれて振り返ると、そこには見覚えのある人物、いや、ヴァンパイアがいた。遠くからでもわかる、ツヤのない単純な深緑の髪。それは間違いなく……。

「レン！」

心の片隅で常に微笑んでいて、意識せずに常に助けを求めている人物が、そこにいた。彼女の顔に思わず笑みが浮かぶ。

レンがシェリルの姿を確認すると、目の色を変えて走り始めた。それを阻もうとする下級の翼翔族達だったが、鬼が憑いたかのようなレンの気迫に圧され、まともに闘わないうちに次々と屍に変わっていった。

「大丈夫！？ 怪我はない！？ どこか痛いところとかない！？」

その一言に、シェリルは思わず吹き出した。テレビドラマの母親のようなその言動がどうにも可笑しくて。とても今、返り血を浴びて赤黒く染まっている本人が言うような言葉ではなくて。

笑う彼女を見て、レンは少しふてくされたが、椅子を目にした途端、戦慄した。椅子にまとわる霧が無意識に発する覇気を感じ取ったのだ。そのレンの顔を見て笑うのをやめ、改めて椅子を見上げるシェリル。

「茶番は終わりか？」

嘲笑うように霧がそう発すると、レンが飛び出した。霧に向かって殴りかかろうとするが、近づいていくにつれ、その椅子がどれほど巨大か、嫌でも思い知らされていく。レンの拳が霧を掻いた時、レンは改めてその巨大な椅子を見上げた。三十メートルは軽く越すような巨大な椅子。レンはそれに目を奪われ、一瞬だけ油断した。突如霧が実体を持ち、巨木よりも太い足が現れた。

シェリルが叫ぶよりも早く、その足はレンを蹴り上げる。反射で辛うじて両腕で防いだレンだったが、受けた衝撃は相当なものだった。真上に蹴り上げられ、その高さは椅子をも越えた。

「レン！」

シェリルは駆け出し、錐揉み状に落下するレンを受け止めようとしたが、間に合わなかった。鈍い音をたてて墜落したレンのもとに座り込み、レンを抱え起こす。

「レン！ レン、しっかりして！」

シェリルが呼び掛けると、レンはシェリルの顔をみた。墜落する瞬間、なんとか受け身をとる事ができた。それでもダメージは相当なもので、動けずに呻き声をあげている。

「……フツ。我が戦士達を退けるほどの力を持つてしても、我の前では赤子も同然だな」

多少の揺れと重量感のある音を伴い、巨大な足が地面を踏みしめる。立ち上がったその者は、霧ではなくなっていた。巨大な図体は椅子をも軽く越えており、見る者に神話に登場する巨人を連想させる。

翼翔族の特徴である翼と尻尾も、それ自体が既に次元の違いを見せ付ける。開けば五十メートルは下らない翼。映画の怪獣のように長く太い尻尾。もはや存在自体が馬鹿らしい。

それを見上げたレンとシェリルは絶句していた。大方予想はしていたが、その予想を超える存在に。

「娘よ……おまえの力を見せてみる」

そう言われ、シェリルはチャンスだと思った。相手は防御の体勢もとらずに目の前でしゃがみこんでいる。それでも相当な大きさではあるが、ハイドの力があれば十分に届く。

倒すなら、相手が自分の力を過信している今しかない！

彼女は今一度ハイドを握り直す。手のひらにチクリとした痛みを感じた。握りすぎたために皮が軽く裂けたのだろう。

精一杯力を溜めて、地を蹴った。普段ではあり得ないほど高く跳び、あれほど高くに見えていた胸が、すぐ目の前に壁のように存在している。

このまま胸を貫ければ、いや、深く傷つけるだけでもハイドの光で倒せる。

シェリルにはそんな確信すらあった。

目論み通り、ハイドは易々と胸に突き刺さり、翼翔族を灰塵へと帰する光を放った。シェリルはあまりにもあっけなすぎたため、思わずにやけてしまう。

しかし、目の前の翼翔族は呻くだけで、一向に消えはしなかった。「ほつ……これがおまえの力が……。相当なものだな、グウ……。この力があれば……」

そしてシェリルの視界は、一瞬にして混沌と化し、治まった時には既にバルドの手に握られていた。ハイドもろとも、である。心の中にハイドの声が響く。

そんな、馬鹿な！？

その声を聞いた瞬間、シェリルの心は一気に闇に支配された。恐怖や絶望などの負の闇に。

「う……ぐ、あ……」

もがいても、腕の一本すら動かすことができない。バルドがあと少し力を込めれば、シェリルは無惨に内容物を撒き散らし、原型を留めない肉塊と化すだろう。

しかしバルドはそうはしなかった。何か他に考えがあるようだった。

「クク、ク……その剣が力の結晶か。手の平が焦がされるように痛い……」

そうつぶやくと、バルドはシェリルをもう片方の手でつまみ上げ、彼女の手握られている剣を奪い取ろうとした。取られまいと力を入れて強く握るシェリルだったがそれがかえって悪い結果を招いた。たとえるなら、走る車に引っ掛けたポールを強く握っていた感じ。バルドの引く力は尋常ではなく、柄を強く握っていたシェリルの両肩から、嫌な音が響いた。

「あがぁ！？」

あまりの激痛に醜い叫びをあげるシェリル。腕からは力が抜け、だらりと垂れ下がる。すぐに意識が飛んだ。

剣を奪ったバルドは、もはや用済みのシェリルを放した。そのシェリルを待っているのは、四十メートルの落下である。どれだけ強靱な肉体を持っても、死は免れない。

気を失い、背面から落下する彼女を、レンはやっとの思いで空中で優しく受けとめた。着地の衝撃が肩にもかかり、その痛みでシェ

リルは目を覚ました。

「レ、ン……」

肩の痛みを堪えながらの悲痛な声。レンの中に、今までにないほどの黒い塊が深く根を張っていった。

「ク、フフフ……ついに、ついに私の力が完全なものに……スウィス、スウィスよ、見るがいい！ 完全となる我をお！」

狂ったように叫んだバルドは、シェリルから奪ったハイドを胸に突き刺した。いや、ねじ込んだと言うほうが正しい。ハイドの小さな刃を、自らの胸に埋め込んでいく。痛みと狂喜の咆哮が、半開きの口から唾液と共に漏れだす。

完全にハイドが埋没すると、胸の風穴が驚異的な早さで塞がった。「これで我は、我は不死となり、聖の力を持って心の臓を貫かれても死にはしなくなった！ 我は……世界の王となる！ 永遠の王にいい！」

狂ったように笑うバルド。レンはその足元で、哀れむように見上げていた。その腕の中には、同じように哀れみの表情を浮かべたシェリルがいる。

その二人に気が付いたバルドは、しゃがみこんだ。

「なぜ、そのような顔をする？ 我が王になるのが、それほど絶望なのか？ ふふはははは！」

嘲笑うように声をあげて笑うバルド。しかしレンは表情を変えない。シェリルも同様に。それが気に食わないのか、二人のすぐ近くに拳を振り下ろすバルド。

「哀しむな、恐怖しろ！ 絶望しろ！ 貴様等にはもはや欠片の希望もありはしないのだぞ！？」

バルドは、焦り始めた。二人が何か企んでいるのではないかと。そして冷静に考えた。

いまさらこいつらになにができようか。邪魔なら、つぶせばいいのだ！

そう考えつき、拳を高々と振り上げる。その動作は、何かを焦っていた。

しかしレンは、ゆっくりと口を開いた。

「気が付かないのか……」

その一言に、バルドのすべての動作が止まった。

「考えたら、わかるでしょ。おまえの行為は、自ら毒を取り込むのと同じなんだよ？」

バルドは……後退った。

「あの光を浴びたおまえの仲間、灰になるんだよ？ 普通の死に方ではなく、ね」

レンの言葉に押されるようにバルドは下がる。そして、焦る自分にやっと気が付く。しかし何故焦るのかはわからない。

「な、なにを言う！ 我はそれに対する耐性を付けるために、我は密かに紫族を狩り、その生命に含まれる聖の力を取り込んできたんだ！ いまさらその力で消えはしない！」

何かを打ち払うかのように、バルドは叫んだ。空気を揺るがすその声には、余裕も覇気もない。

「じゃあ、それが悪かったんだ。自分の胸、見てみるよ」

レンのその一言が、バルド自身の身に起きたことを悟らせた。もはやそこまでくると見なくてもわかるが、バルドは見ずにはいられない。

自らの胸を見ると、穴が開いている。そこから白い光が漏れてきている。弱々しい光が。バルドは慌てて手でそれを塞ごうとしたが、光に手が触れた瞬間、皮膚が焼け肉が裂けた。

「ば……馬鹿なっ！ こんな、はず……はずが……ないっ！」

零れる光は徐々に強まり、それを必死に隠そうとするバルド。手を胸の前に何度も持っていていき、胸の筋肉を寄せて穴を塞ごうとしていたが、気がつけば既に手には指がついてはいなかった。光を浴び、消滅してしまっていた。

バルドはそれでもなお覆い隠そうと努力するが、腕は徐々に短くなり、光はどんどん強くなっていく。

「馬鹿なっ馬鹿なっ馬鹿なっ馬鹿なっ！　こんなことが、こんなことが！」

「あるんだよ。いま、こうして」

血を撒き散らしながら、幼児に退行したような行動をするバルドに、レンは冷酷に告げる。

「これは僕の予測だけど、おまえの体内に蓄められた聖の力が、シエリルの剣と融合した瞬間に爆発しちゃったんじゃないかな？」

レンはそう言い放つと、後ろに振り返り、歩きだした。バルドはその背中に向かって、無い腕を突き伸ばした。

「た、助け、て……くれ……。スウィス、どこにいる……助けてくれ……」

バルドは死の恐怖を前にして、精神も崩壊していた。知っている翼翔族の上級階級の者の名を口にしては、助けてくれと嘆願した。

ある程度の距離を取ると、レンはバルドに振り返った。

「終わり、だね」

「……うん」

シエリルが頷くと、バルドは悲痛な咆哮をあげ、内側からの光にゆっくりと吞まれていった。シエリルは光の中心にハイドの姿を確認した。剣ではなく、人型の。その瞬間、時が止まった。

『どうやら、お別れのようなのだ。短い間じゃったが、おまえを守ることができてよかったわい』

その喋り方に似合わず、ハイドは好青年といった印象をうける青年だった。

どうして、お別れなの？

シエリルが尋ねると、ハイドは笑った。

『不死のこいつをあの世に直接送らなきゃならんからの。ワシも一

緒に行かんとならんのじゃよ』

そう……。さようなら、今までありがとう。

シェリルがそう言うと、ハイドは笑って手を振った。ゆっくりとその姿が消えていき、それに応呼するようにバルドを呑み込んだ光も消滅していく。

後には、巨大な椅子と、二人だけが残された。

「……終わり、だね？」

シェリルが尋ねる。レンはシェリルをゆっくりと床に下ろした。腕が動いたたびにシェリルは顔をしかめる。

「うん、終わったよ」

レンはシェリルの横に座った。

おそらく数時間ほどだろう。二人は静かに遠くを見ていた。

「……ここから、出られないのかな？」

シェリルがポツリと零すと、レンは遠くを見つめたまま、答える。

「うん……」

沈黙は、気まずいものになった。しかし不思議と居心地は悪くない。

またしばらく時間がすぎると、不意にレンがシェリルに覆い被さる。

「……シェリル」

そのまま、二人は唇を重ねた。互いの唇を優しく撫でるように。唇を離すと、レンは優しく微笑んだ。

「たった一つだけ、あった。出る方法」

レンがそう言うと、シェリルは驚いて目を見開いた。

「ここから、君を過去に飛ばせばいいんだ。僕と君の存在が交わった日に」

彼の口から出た言葉は、シェリルには理解できなかった。レンは目を閉じ、額をシェリルの額に付ける。その瞬間、シェリルの頭に

あの日の光景が蘇った。そう、レンと出会った、今から数日ほど前の日の光景が。

すると、体が突然沈み始めた、驚いて起き上がろうとすると、レンに止められた。

「君の記憶を、この断層の床に流し込んだ。君はあの日の朝に落ちることになる」

「えっ？」

理解はできなかった。だが、シェリルはレンの瞳に隠された感情を見抜いた。

「まさか、もう、合えないの？」

レンは軽く頷いた。

「僕の記憶は、移さなかった。そうしたら、君は僕の存在しない世界で生きることになる。『ヴァンパイアに出会わない人生』を歩むことになるから、君の大切な人たちもみんな、死なない」

レンは嬉しそうに、悲しそうにそう言った。シェリルは、「レンに出会わない人生なんて嫌だ」と反論しようとしたが、レンの行動によって遮られた。レンはシェリルの耳に、自分の口を近付けた。

「」

彼女の耳元で、優しくささやいた。それを最後に、シェリルの視界は暗転し、意識は離れていった。

レン、約束だよ……。

ささやかれた言葉に、そう応えた。

時計がけたましく鳴り響く。まだ正常に働かない頭は、とにかく時計を止めたかった。いつも時計のある位置に手を伸ばし、時計の頭にあるスイッチを叩く。

時計はチンツと余韻短く鳴り終わり、彼女は重たい目を擦りながら起き上がる。

眠い……体が重い……昨日は、何したんだっけ……？

そう思い、記憶を掘り返す。確か、巨大な怪物がいて、殺されかけて……。

そこまで思い出すと、残りの全てがフラッシュしたかのように思い出された。

はっとしたシェリルは急いで布団から飛び出し、部屋を出、階段を駆け降った。居間の扉を勢い良く開き、ある人物を探す。

「ど、どうしたのシェリルちゃん!? まさか泥棒とか強盗とかが入ってきたの!?!」

探していた人物は、扉を開けた瞬間に見つけた。大慌てで武器になりそうなものを手に取る。

「あ……」

シェリルは泣きそうになったが、唇を噛み締めて我慢し、笑顔を作った。

「ううん、なんでもないよハンナさん」

声が震えていたが、ハンナは慌てていて、そんな些細なことには気付かなかった。

「本当に? 本っ当に大丈夫?」

ハンナはいつものように心配してくれている。シェリルは必死に堪えながら、布団片付けるの忘れてた、と言って部屋に急いで戻った。

部屋に飛び込むと、布団に飛び付いた。

「……いぎでる……よかつ……ヒグ……エグツ……」

笑顔で、泣いた。

気持ちを落ち着かせ、赤くなった目に目薬を垂らして赤みを引かせ、何事もなかったかのように再び居間に戻った。

朝食を食べ、顔を洗う。高鳴る鼓動が彼女を急かす。もう一人、もう一人も確認したい。

いつてきますと元氣よく家を飛び出し、学校に行く道を走る。そして、いつも合流するY字路で、その人物を待った。

「おー、今日は珍しく早いじゃん！」

待ち遠しかった声が聞こえた。そつちを振り返ると、見慣れているが懐かしい青いショートヘアを揺らしながら駆けてくる少女がいた。

少女はシェリルの元までくると、膝に手をついて、わざとらしく疲れた素振りをしてみせた。

「いやあー、私の可愛いシェリルちゃんの姿が目に入ると、どうしても急いじゃうなー」

はははっと笑い、シェリルの顔を覗くエリス。その目がみたのは、歡喜の表情で涙を流すシェリルの顔だった。

「シェリル、何、どうしたの？ 笑いながら泣くなんて、まるで数年ぶりっ!？」

言葉の途中で、突然シェリルが抱きついてきた。それほど無い胸に顔を擦り付けてくる。

「ちょ、シェリ……こんなところで！」

顔を赤らめながら、シェリルの肩を掴む。その時にエリスは、シェリルが泣いていることを知った。引き剥がそうとしていた手は、シェリルを優しく包んでいた。

「よしよし、なんだかよくわかんないけど、泣きたきや存分に泣きなよー」

優しく声をかけ、すすり泣くシェリルを、赤ん坊をあやすように抱き締めるエリス。このあとしばらくはその状態が続いた。

学校で授業を受ける。ほんの最近までは退屈で仕方がなかった授業が、いやに新鮮に感じられた。教師の一言一句すら逃さずに聞き入っていた。

昼食の後にはエリスと好きな俳優の話をしたり、からかいあったりした。あまりの嬉しさに何度も泣きそうになるものだから、エリスはシェリルを引きつれて、人が滅多にこない屋上で話し合った。シェリルが泣きなくなったら、エリスは胸を貸した。濡れることも気にせずに。

シェリルが謝ると、「大丈夫大丈夫、洗えばいいからさっ！」と答えた。エリスとしては、急に泣き出すシェリルが心配だったが、彼女が言いたがらないので深くは追及しなかった。なぜなら、笑顔が昨日より輝いていたから。作り笑いじゃない、本当の笑いだったから。

放課後、部活に向かうエリスに別れの言葉を言い、一人自宅に向かって歩いていく。

進むにつれ、どんどん胸が高鳴っていくことを、シェリルは不思議に思った。

なんだろう、なにか忘れてる気がする。

もやもやとしたなにかがシェリルの中で膨らんでいった。それが期待だということに気が付いたのは、なんの変哲もない、どこにでもある丁字路が見えてきた時だった。

シェリルは無意識に走りだしていた。Ｔ字路に近づくほどに期待が膨らんでいく。そして角に着いた時、期待は最高潮に達していた。胸の高鳴りを耳で感じながら、角から飛び出すように覗き込む。しかしそこには……サラリーマンや女性がいるばかりだった。

シェリルの中の期待が、一気に喪失感に変わった。何か、とても大事なことが記憶から抜け落ちている。憶えていることは憶えている。

翼のある怪物にハンナとエリスが殺され、とても嫌な女性に殺されかけ、猫背の男性に黒いコートの男性、自分の力のハイド、怪物の親玉。

しかし、奇妙だった。何かが抜け落ちていた。自分は何もない空間に向かって話しかけたり、笑ったり、胸をときめかせたり、抱かれたり……。そこには“誰か”がいたはず。なのだが……。

シェリルは頬に伝う感触を感じた。触れると、涙だった。気付かぬうちに泣いていた。わけもわからぬまま、とめどなく流れる涙を拭いながら、家へと向かって走った。

家に飛び込むと、ハンナの言葉も無視して部屋に飛び込んだ。鍵を掛け、布団に潜り込み、泣いた。朝とは違う、悲しい顔で。

しかしその夜、シェリルは一つだけ思い出した。誰が言ったのか、いつ言われたのかは全く分からない言葉を。

必ず合いにいくから。君のもとに。絶対に。だから、待っててね

その言葉をふと思い出した瞬間、シェリルは不思議と幸福感に満たされた。そして何故か、その約束は果たされると、そう信じた。

時間は絶えず進み続ける。彼女の中の時間は、
今新しい時間を刻み始めた

強大な闇滅び、すべてが夢の跡、新たな時を歩む少女（終）（後書き）

はい、これにて本編は終了です。次話からは、本編で語られなかったり説明が不足していたりわかりにくい部分を、シエリル、レン、ンケドゥ、ルイスのパートに分け、さらに彼らの過去、そしてエピソードを書いた短編を出して行きます。そして設定などを作者とキヤラが話し合う場を。それらが終わると次からは、思いつきで書く短編などを掲載して行きます。まだまだこの作品にお付き合いください。本編読破、お疲れ様でした。

彼の記憶 #1（前書き）

サブタイトルは、「彼の記憶」と書いて「かのせかい」と読んであげて下さい。いや、特に意味はないので普通に「かれのきおく」と読んでも構いませんが……。

彼の記憶 #1

ヴァンパイアである少年が、その日、ニンゲンを襲った。

ヴァンパイアにとって生き物の生命というのは必要不可欠なもので、普通の食物では補えないものを満たす。別にニンゲンでなくてもいいが、ニンゲン以外のは不味い。

ハンターの目をかいくぐり、少年は二人のニンゲンを食した。ニンゲンと同じような姿をもつ少年は、蹴脚族と呼ばれる種族のヴァンパイアである。子供といっても、ニンゲンより遥かに優れた骨格と筋力を持っているため、並のニンゲンでは歯が立たない。

少年の足元には若い男女の死体が転がっている。人目を忍んだ密会か、はたまた駆け落ちか。男女が人気のない所にいるなど、この世界ではそれくらいしかない。

少年は満足すると、林の中へと消えていった。これ以上長居すると、ハンターに見つかって始末されてしまう。

ハンターとは、紫族と呼ばれる他の世界、つまりは別の時空間から、断層と呼ばれる空間のズレを通じてきたもののことを言う。彼らは蹴脚族並の運動能力と戦闘能力を持ち、ヴァンパイアを骨も残さず消滅させる武器を使う。

見た目はニンゲンと同じであるため、初対面なら完全に油断してしまう。その上彼らの生命は、ヴァンパイアにとって最上級の味であるため、その美味しそうな匂いに釣られてふらりと不用意に近付いてしまう。

そして、彼らハンターに惹き付けられて生きて帰れるものは無い。等しい。

少年はその日、実に百数日ぶりのニンゲンの生命に有り付けた。林を抜けた先の、人目に全く付かない洞窟の中で、少年は生命の余韻に浸りながら、ネズミの干し肉をかじっていた。

「……またしばらくは動物なので我慢だな」

そう呟き、小さくなつた火に枝をくべようとしたとき、少年の手が止まった。そしてその手は、枝を持ったまま洞窟の入り口に向けられた。

その手の先は、入り口に立つ人影の胸を指している。

「先客か。ニンゲン……じゃなさそうだな」

侵入者はそうつぶやくと、少年が殺気を放っているのにずけずけと洞窟に入り、ずしんと火の近くに座り込んだ。あまりにも堂々としていたため、少年は飛び掛かる機会を無くした。

少年は改めて侵入者を眺めた。少年は最初、口調や行動から男と思っていたが、改めてみると女であつた。深緑の髪は短くざつくばらんに切られており、あまり気を遣われてはいなかった。体つきはコートに隠れていてわからなかったが、顔は整っていた。

少年としては、目の前に餌が飛び込んできたようなものだ。思わず口元が弛んだ。しかし……。

「変な考えは、こいつを見て改めな」

少年が動こうとした瞬間、いつの間にか喉元に剣を突き付けられていた。少年には彼女の腕はおるか、抜刀の動きすら見切れなかった。気が付いたら剣を向けられていた。まさにそんな感じである。

少したつてから、侵入者の女は剣を下ろした。腰に提げている鞘に剣を収めてからやつと、少年は腰を地面に落とした。暑くはないが汗が一筋、頬を伝った。

「ははははっ！ 見た目通りのガキだな！」

女は豪快に笑うと、懷から保存食を取り出すと、千切つて口に放り込んだ。それを横目に、少年も干し肉をかじる。

奇妙な光景が、そこにあつた。女と少年が黙々と手にした食料を食している。しかも、片やヴァンパイア、片やニンゲンなわけであ

る。

食事が終わると、次は沈黙が訪れた。両者とも一言も発せず、ただ火に見入っていた。危なっかしく揺れては、力強く直立する。炎は見ている人を飽きさせないよう、ゆらりゆらりと踊る。

「オレはカナン・ダルダロスっていうんだ。おまえは？」

女が唐突に尋ねてきた。少年は女の顔を見た後、視線を火に戻す。「バンケティアドウル」

少年は、小さくつぶやくように名を告げた。

「長い。ンケドゥって呼ぶぞ」

女は、強引に決めつけ反論を許さなかった。少年は少しむっとしたが、彼女との付き合いも今限りだと思ったので反論はしなかった。なによりも、その響きを気に入ってしまった。

ンケドゥ、か……。

少年は少し、微笑んだ。

翌朝、目を開けてその姿を探すが、見当たらない。少年ンケドゥは、どこか寂しさを覚えながらも、朝食に干し肉をかじる。

気を張って寝ていた。鳥の足音にも反応する自信もあった。ただ、彼女はなんの気配も発せず立ち去った。そのことからンケドゥは、彼女が歴戦の強者だということを推測した。

彼女がもし、自分の命を狙ってきたら？

自分の命は、バターをナイフで削ぐかのように簡単に消されるだろう。あれがハンターか。ンケドゥは苦い顔をした。同時に、悲しみの表情も浮かんだ。

一声くらい掛けていつて欲しかった。素直にそう思った。

「……またいつか、あえるかな？」
一人呟き、彼は森へ飛び出した。

野を駆け山を駆けて生活しているンケドウにとって、街は憧れの一つだった。隠れる場所は数知れず、獲物も溢れ、なおかつ手を伸ばせばいつでも。そんな幻想を抱いていた。

実際は、人一人が消えると、必ずと言っていいほど元凶のヴァンパイアが消える。正体がばれてもだ。街にいるヴァンパイアもまた命を賭けてそこにいる。野生で暮らすヴァンパイアと殆ど代わり映えはしない。しかし、街に入ったことすらないンケドウに、それを知るよしはない。ただ遠巻きに見つめる街が輝いて見えた。

木の上から、ある街を眺めていた。その街は背の高い建物が多く、高い木に登っていても地平線が隠されていた。その街には防壁が敷かれていて、その壁には弩を携えた兵士が配備されている。飛んでも走っても、その壁は越えられない。

「……はあ」

木の上でため息を吐くンケドウ。最近は冬季が近付いて来たため、動物達は穴に籠もり始め、なかなか獲物にありつけない。干物をかじっても満たされない空腹感。

生命を吸収できなければ、ヴァンパイアは枯渇して死ぬ。ンケドウもまた、死の恐怖に少しずつ蝕まれていた。愚かしい考えが浮かぶ。

「……あの兵士を……いや、ハンターでも。闇討ちすれば僕にだって……」

一人ブツブツと算段を唱えている。そのため、近くまで来た気配に気が付いていない。独り言はすべて、ンケドウの背後の影に筒抜けだ。

どうする、仕留めるか？ 影は多少躊躇した。剣の柄に手は掛け

ているが、目の前のヴァンパイアには見覚えがある。

影は、判断した。

「やあンケドウ。こんな所で再開するとはな」

剣の柄から手を離し、ンケドウへの挨拶のために振る。ンケドウは警戒して振り返ったが、その顔を見た瞬間、安堵した。

「……ケビン」

「だ、誰だよそれっ」

うる覚えの名前は見事に外れ、目の前の女は笑った。ンケドウも嬉しくなり、笑う。

「カナンだ。カナン・ダルダロス。もう忘れんなよ〜？」

いいながら、彼女は人差し指でンケドウの額を強めに突いた。ンケドウは笑いながら額を擦る。

「なるほどな。それであんな独り言をブツブツと……」

ンケドウはカナンに、自分が空腹状態で、生命がなければ枯渴して死んでしまうことを話した。実際、今はピンピンしているようにも見えるが、あと一週間獲物がなければ動けなくなっていた。

彼女はンケドウの顔を見、悩む。

こいつを見殺しにするのは目覚めが悪くなる。しかし今の時期、動物なんかは殆ど隠れちゃってるし、かと言ってニンゲンを襲わせるわけにもいかんし……。

悩み悩んだ末、彼女が取った行動は……。

「……何？」

「吸え」

自分の手を、ンケドウに突き出していた。長袖を捲り、白い腕を露出させる。ンケドウは生唾を飲んだ。いい匂いがする。体臭とかの類いではなく、料理の香りでのいい匂い。つまりは美味しそう、

と言うことだ。

我慢しきれない手が彼女の腕をつかみ顔前へ持っていく。口を開いて鋭い歯を剥き出し、腕に歯をあて、彼女を上目遣いで見つめる。「あんま遠慮すんな。オレの命に関わらない程度だったらくれてやるからよ」

カナンは優しく笑いかけた。口調がもう少し女らしければ、あるいは修道女に見えるほどだろう。

そんな彼女の言葉に我慢が利かなくなったンケドゥは、恐る恐るだがその腕に牙を突き立て、食い込ませる。

「いつつ……！ ゆっくりやんなよ、むしろ痛えぞ」

カナンはそういったが、ンケドゥには殆ど聞こえていなかった。急に、しかし少しづつ血を、生命を吸い上げる。

「ん……」

カナンは、生命を吸われるという事に対して嫌悪の表情をしたが、内心はまんざらでもなかった。ほどよい脱力感と心地のいい倦怠感がゆっくりと浸透していく。

束の間、その感覚に流された後、ンケドゥの頭を人差し指で押し退けた。

「はい、終わりっ。これ以上はオレが危ないからな」

残念そうな顔をするンケドゥに、そう笑いかけた。それに釣られてンケドゥも笑った。

煌びやかにガス灯が照らす街を一望できる丘のうえの森林に、ンケドゥとカナンは寝転がり、空を見ていた。星が所狭しとひしめく天井は明かりをもたらし、薄暗い中でも草木の末端までよく見える。「なあンケドゥ、おまえの親はやっぱり死んでるのか？」

カナンが唐突に口を開いた。ンケドゥは空を見上げたまま、記憶の中のビジョンを視界に広げる。

むせ返るような血の匂い。部屋一面に撒かれている赤い液体。肉塊がいくつも散乱していて、五体満足の死体など一つもありはない。

自分に覆い被さる、首のない母親代わりの女の死体を退け、血の池に這い出る。床を叩いた時の湿った音に反応するものはいない。この部屋にいた皆は、死んだ。

なにがあつたかは覚えていない。だが、何が起きたのかは予想できる。

「……」

何者かの襲撃を受け、ここの者達は命を断たれたのだ。

「……」

バンケティアドウルは床の血を掬い、口に含んだ。

「……おい、しい……ママの血……」

涙を流しながら、床に撒かれた血を食った。自分を、ヴァンパイアである自分を我が子のように育ててくれた者の血を食った。

血が渴き、舐めとれなくなるまで啜り続けた

「……親は、気が付いたらいなかった。オレを拾ってくれた人も、ずっと前に死んだ」

感情も込めずに淡々と言う。悲しいことには悲しい。しかし涙が出るほどじゃない。いや、涙は枯れている。ンケドウは自分に多少の嫌気が差した。

「そっか」

カナンは特に悪びれた様子もなく小さく漏らす。

しばらく二人は星を眺めていたが、飽きて眠ってしまった。眠るといつても、ほとんど目を瞑っただけに等しいのだが。

小鳥のさえずりに目を覚ました。ンケドゥはゆっくりと瞼を押し上げ、カナンの寝ていたほうに目を向ける。

どうせまた……。そんな予感が頭にあっただ、その予想はあっさりと裏切られる。静かに寝息を立てて、その人はそこにいた。それも、少し手を伸ばせば届くような距離に。

「……」

あまりに近く、ンケドゥは少し驚き、緊張した。彼女の綺麗な顔がすぐ近くにあるのだ。しばらく水浴びをしていないのか、髪はいくつかの束になってべたついていて、目を凝らせば顔に泥や血が付いているのが分かる。

ンケドゥはもったいないなと思った。彼女の魅力が、そのことによって少し削がれていると思ったからだ。

ンケドゥはなんとなく、彼女の頭に手を伸ばした。なるべく静かに、^{けど}気取られないように。

指先に髪が触れた。感触はなかった。その刹那に手首を掴まれたからだ。心臓が大きく飛び跳ね、視界が一瞬揺れる。

「……なんか用か？」

カナンはぶっきらぼうにそう言うと、目を開けた。ンケドゥは耳元で響く鼓動を感じながら、なんでもないとやって平静を装ってみせた。

カナンはンケドゥをしばらく見つめたあと、自分の髪を撫でる。

「……水浴び、すっかなあ……」

そう呟くと、ンケドゥの手を解放して立ち上がった。一つ伸びをして、間接を鳴らす。

「んゝあゝ！……ん？ おまえも来るか？」

見つめるンケドゥに悪戯っぽく笑いかける。ンケドゥは頷きたい気持ちで羞恥心で押さえ込み、首を横に振る。

街が見える丘から、近くも遠くもない距離に、小さな湖がある。

カナンはそこに水浴びにと来た。なんだかんだ言っていたが、結局ンケドウもついてくることになった。

湖に着くなりカナンは着ているものを脱ぎ始めた。ンケドウはあわてて目を反らし、少し距離を置いた。

「なんだ、恥ずかしいのか？ 見たって別に減るもんじゃあるめえし、んな気にすることなんかねえだろ」

裸体を見られることをなんとも思っていない様子のカナンは、ンケドウに見せ付けるかのように、腰に手を当て仁王立ちしている。

ンケドウは心中激しく葛藤しながら、結局は後ろを向いて座り込んでしまった。カナンはからかうように笑うと、湖へと飛び込んだ。湖は見た目によらず深度はあるようだ。水柱を立て、水中に姿を消すカナン。少ししてから浮上し、体を擦り始める。

彼女が潜っている間に、ンケドウはどこかへといなくなっていた。照れたのか。カナンはそう考え、笑った。しかし……。

ンケドウは一人、森の中を駆けていた。

運がない。照れ隠しに森林に飛び込んだ矢先、ハンターにばつたりと出くわしてしまった。利き腕である左腕は半分ほど引き裂かれ、激痛をともなつてなんとかぶらさがっている。

ハンターが咄嗟に使った得物は、動物などを解体する時に使う鉋のようなもので鉄製だったため、左腕の切断までには至らなかったが相当なダメージは負った。事実左手はまったく機能せず、肌も青白くなつてきている。

今にも千切れそうな左腕を、右手で必死に押さえながら追跡者から逃げる。逃げるのは得意分野だったが、ここまでの大怪我を負ったの逃走は初めてだった。思考が二転三転と、混沌としたループが発生していて、まったく纏まる様子が無い。

とにかく早く、遠くへ。焦る一方の頭は、その短文だけをはつきりとさせていた。どう逃げる、どう撒く。そんなものは二の次三の

次であるように。

左腕を木の枝にぶつけた。まったく不意の出来事。その衝撃は傷口を強く叩く。普段なら気にも止めないだろうその出来事が、今は傷を抉り叫びを上げさせる。バランスを崩し地に倒れ落ちる。その衝撃はもはや、呼吸や思考などを簡単に吹き飛ばすほどのものだった。

うずくまって必死に痛みを和らげていると、ハンターが追い付いてきた。

「追い付いたぞ、ヴァンパイア！ おまえの首には賞金が懸かっている。恨みはないが、死んでくれ」

死が、目の前に立っていた。剣を雄々しく振り上げるハンターを見上げて、ンケドゥは真っ白な頭で考えるという、矛盾した境地に立った。

不意に、母親の代わりをしていていた女性を思い出した。

餓死しかけていたところを、手料理と鶏の血と自らの血で助けてくれた時を。

同じ村の子供達に『ヴァンパイア！』と罵られ、石を投げられ、棒切れで殴られて泣いていた時、優しい言葉で慰めてくれた時を。やられた仕返しに相手を殴り帰った時に、『力を守る時以外に振るってはいけない』とこっぴどく叱られた時を。

首のない死体となり、自分を庇うように重なっていた母親を。

ゆっくりと、だが刹那の内に映像が流れる。瞳に焼き付けてきた記憶がよぎっていく。そして最後に浮かんだのが、カナンの顔だった。

死にたく、ないっ！

振り下ろされる剣を、片手だけで倒立をして躲し、足を横に薙ぎ相手の顎を蹴る。ハンターはぐるりと半回転して、剣と共に地に伏した。

ンケドゥはすかさず上にのしかかり、犬歯を剥き出し首筋に突き立てた。思考すらまともになっていなかったハンターは、何が起きたのか理解する前に絶命していた。

首筋から口を離すと、ンケドゥは左腕の激痛により、屍の隣に転がった。激しい動きにより、裂け目がさらに広がったようだった。出血も激しく、いよいよもって意識に霧^{もや}がかかり始めた。激痛を感じても、不思議と藻掻く気が起きなくなってきた。

そこからの記憶はまるで夢のようにぼんやりとしている。カナンが駆け付けてきて自分を仰向けにし、左腕の傷になにかをしている。必死な形相で顔を覗き込んで何かを叫んでいる。抱き上げられ、どこかに運ばれている。

そこで、すべての感覚が途切れた。

目を覚ますと、辺りは朝靄が掛かり、気温は益々低くなっていた。一つ身震いをして半身を起こそうとすると、腹に重圧を感じた。首を軽く起こして確認すると、ざつくばらんに短くされた深緑の髪ときれいな顔があった。

ンケドゥは左手でその髪を撫でようとしたが、鈍痛を感じて左腕を動かすのをやめた。ああそういえばと、気を失う前を思い出して、右手をカナンの髪に伸ばす。触れた瞬間に止められるだろうという予想を立てていたが、意外にもそれを裏切られた。

髪に触れて、一撫、二撫。しかし目を覚まさずに寝息を立てている。もしかと思って、軽く肩を揺すってみたが、反応がない。その事実にも、ンケドゥは妙に支配感を覚え、髪に触れる。

あまり滑りはよくはないが、触り心地はよかった。指に絡ませたり、束を巻いてみたり、軽く掴んでみたり。とにかく触り、弄っていた。指を髪に滑らせる度に気持ちが高ぶっていく。彼女が服を脱ぎ始めた時に感じた興奮に似たものが、胸を支配していく。

鼓動が早まる。呼吸が浅くなる。

「……何をしてんだ？」

彼女は急に目を覚まし、口を開く。胸に杭を打たれたかのような衝撃を感じ、急いで手を離す。

「いや、待て。今のはあんまり悪い気はしない。よければもう少し続けてもいいぞ？」

意地悪く、優しく微笑むカナン。ンケドウはその言葉に甘んじ、右手を再び髪に滑らせる。目を閉じ、意識でンケドウの手を感じるカナン。二人を包む空気が、温かく、柔らかくなっていく。

「一緒に旅、しないか？」

カナンが突如、そう切り出した。

沈んでいく真っ赤な太陽。地平線に片足を踏み入れたとき、カナンが呟くように切り出したのだった。驚いた様子でンケドウは彼女に振り返る。

「……いいの？」

質問にはなっていたが、ンケドウの応えはイエスだ。カナンはンケドウと目を合わせてほほ笑み、座っている現在地から飛び降りた。十メートルほど落下した後、草原に足音を立てて着地する。遙か頭上にいるンケドウを見上げ、叫んだ。

「誘っというノーってのは反則だろ？」

満面の笑みで愚問に答えてくれた。ンケドウは飛び上がりたい気持ちになった。

「そうと決まりやあ、街にダッシュだ！ 野宿より宿に入ったほうがゆっくり眠れるからな！」

そう言つと、カナンはコートをなびかせて走りだした。ンケドウも木から飛び降り、その背中を追い掛けた。

彼の記憶 #1（後書き）

短編と言っておきながら、続きます、ええ。

「おい、そっちに行つたぞ！」

森林の中で女が叫ぶ。何かが恐れるように彼女から離れていく。木々など存在しないかのようにそれは素早く移動している。走る、と言うよりは、滑ると言ったほうが正しいほどの滑らかな動き。

逃げるそれは、自分の向かう先にもう一人居ることに全く気付いてはいない。タイミングを見計らい、木の枝から突如舞い降りた。

「捕まえたっ！」

「フシヤアアア！」

飛び出した人物に捕まえられたそれは、おおよそ見た目にそぐわぬ威嚇をし、前足をむやみやたらに、しかし相手の顔に確実に振り下ろす。

「い、痛っ！ いたたたた！」

捕まえている人物は、鋭い爪の餌食になりながらも決してそれを離そうとはしない。やがて女が彼に歩み寄ってきて、その首根っこをつまみ上げる。

「はいはい、猫さん捕獲完了つと。ンケドウ大丈夫か？」

彼女は猫を片手に、あちこちの引つ掻き傷を抱えて悶絶しているンケドウに声をかける。彼は恨めしそうな顔を彼女に向けた。

「すつごく痛いんだけど」

その顔には幾筋もの赤い線が走り、その端からは赤い滴が少し流れている。それを見て彼女は、思わず吹き出してしまった。

「はっははははっ！ おもしれー顔！」

笑われてンケドウは少しふくれ、顔を背けた。

「まあとりあえず、これで今夜の宿代にはなるだろ」

カナンはそう言つて、未だに全身を振って抵抗する猫の後頭部を

少し強くデコピンし、意識を飛ばせる。そしてその猫をンケドウに投げて寄越す。彼は慌てて猫を優しくキャッチした。

よし、行くか！ と、カナンは腕を振り上げ伸びをし、この先にある街へと向かった。ンケドウもその後が続いていく。

「まあ、ジーナちゃん！ どこ行ってたのー心配したのよー？」

恰幅の大きいセレブの女性が、二人が捕まえてきた猫を抱き締める。みぎやああああ！ と悲痛な叫びを上げる猫にンケドウは少々同情した。

「ご依頼のほうは、これでよろしかったですか？」

カナンが慣れない様子でそう尋ねると、女性は満足そうな顔をして袋を取り出し、カナンに手渡した。

毎度ー、とカナンは袋を受け取り、その場を後にした。ンケドウは猫に哀れみの視線を送った後、カナンの背を追う。

「につひつひ！ まさか、猫捕まえるだけでこんなにももらえるなんてな」

袋の中からは小気味いいジャラジャラという音が聞こえてくる。

「これなら、宿に泊まるついでにいいもん喰えるな。ンケドウー、何食いたい？」

彼女が振り返って尋ねると、後ろを付いてきていたはずの人物がいない。背に冷えたものを感じ、急いで来た道を引き返す。

マズいって、街中で発作はマズいって！

彼女は焦りを押さえながら、ンケドウを探した。

「…………ごめん、なさい…………」

ンケドウが、落ち着いたところに彼女に発した第一声。案の定、道の端で彼は発作を起こして伏せ込んでいた。

彼はヴァンパイアである。いくらものを食べて栄養を摂取し、人と同化して生活していてもやはり、その生命力は人の生命を原料にしなければ維持できない。小動物やカナンの生命で食いつないではいるが、やはり根本的に量は足りてはいなかった。

ンケドウはカナンに包み込まれるように抱かれていた。

今はほとんど使われていない建物の密集地。その路地。犯罪者や黒い一面を持つ人がここに住み着いている。いわゆる裏路地と呼ばれる場所。常人なら滅多に踏み込まないような雰囲気醸し出している。

彼の餓えは予想以上に激しく、カナンは危うく昏睡状態に陥る所であった。

「……ああ、オレにも悪い所は、あった。……悪いな、腹一杯、喰わせてやれなくて……」

意識が朦朧としている中、カナンは答えた。今はギリギリで気を失うのを堪えている。

ンケドウは泣き出しそうになりながら、首を横に振った。悪いのは自分だと、ヴァンパイアである自分だ、と無言で語る。そんなンケドウの頭を、彼女は優しく抱きすくめる。

「……宿、探しに行くか」

そう言つて、ンケドウを体から離れた時、その背後に五、六人の人が見えた。

「なあ、おねーさん、俺たちもだっこしてくれない？」

ゲラゲラと何が可笑しいのか、男たちは笑っている。カナンの嫌いな人種だ。こういう輩にはまともな精神を持ったやつはいない。相手が誰であろうと容赦はしない。彼女が知りえる彼らの悪業は片手では数えきれない。

この場合は、強盗、暴行。……強姦もか。

カナンは自分が女であることを失念していて、思わず吹いてしまった。その笑いを自分達への嘲笑と捉えたのか、男たちから笑いが消えた。

この程度の輩なら、片腕だけでも十分だろうが生憎、今は吸血の後遺症で全身に力が入らない。ため息後にンケドウに耳打ちする。

「加減して、死なん程度にボコボコにしてやれ。二度と馬鹿な考えを起こせないくらいに、な」

その言葉は意外と大きく語られ、男たちの怒りに油を注いだ。

「舐めてんじゃねーぞこらあ！」

男たちは一斉に飛び掛かっていく。ンケドウはすぐに行動に出た。一番に飛び出してきた男の顎を蹴り上げ、横から殴りかかってきた男の肩の上を横回りに乗り越え、その後ろの男の頭に足を振り下ろす。乗り越えられた男はバランスを崩し、前のめりに壁に突っこんだ。

一瞬で三人の男が倒れ、残りの三人は後退った。

「どうする、続ける？」

ンケドウは顔に笑みを浮かべて問いた。彼が大人ならば、男たちは慌ててその場から逃げ出しただろうが、生憎彼は男たちからしてみれば少年である。年下に背を向けるなど、彼らの妙なプライドが許さない。

「な、なめんじゃねええ！」

三人は一斉に飛び掛かってきた。数で優位に立とうとする集団戦法の一つだ。しかしンケドウはものともせず、疾風の如く三人を叩き伏せる。

手を埃を払うように軽く叩き、カナンに振り返る。

「さあ、行こうよ」

やれやれと言った感じで、カナンは立ち上がり、路地から出る方向に歩き始めた。

宿をとり、二人部屋のベッドでぐったりと寝込むカナン。吸血による血液不足は予想以上に大きく、部屋に着いた途端に意識を保てなくなり、床に顔面から落ちるところだった。危うい所でンケドウが受け止め、その身体をベッドまで運び、優しく寝かせてあげた。その後は、日が落ちるまでカナンの顔を眺め続け、日が落ちた後は外に出ていた。カナンが目覚めた時、何かお詫びに渡そうと思い、商店街へと足を運んだ。ポケットに多少のお金を詰め込んで。

商店街は結構な人の流れがあった。視界一杯に人、人、人。カナンと出会う前のンケドウなら、すぐさま飛び付き、片っ端から生命を頂いていただろう。しかし今なら耐えられる。先程カナンの生命を相当吸収したため、餓えは癒されている。しばらくは大丈夫だった。

一つの小物店に寄ってみた。カランという小気味いい音を立ててドアが開く。

「いらっしやいませ。生憎今日は閉店です」

綺麗な声が意識を逆撫でする。身震いが、した。

嫌な予感しかない。ドアが閉まった瞬間から、カウンターの方から冷えたものを感じた。それは今までに感じたことのないような冷たい殺気だった。自分の息が白いんじゃないかとンケドウは息を吐いてみた。

カウンターのほうで誰かが起き上がる。店主……ではなさそうだ。口の端から赤いものを流しながら微笑む少年だ。外見年齢はンケドウと変わりなさそうだ。

「……なんだ、同族か」

少年の言葉に敵意は感じなかったが、殺気は未だに消えない。少年はカウンターを乗り越えた。ンケドウも自然と応戦態勢を取る。

「でも、君からは美味しそうな匂いがするんだよねー。……別に、同族から生命もらっちゃ駄目なんてルール、なかったよね」

その言葉にも敵意は無かった。が、冷えた殺気がさらに鋭さを持

った。ナイフのような鋭さの冷気を纏った指に心臓を握られるような感覚。それは、目の前の少年がただ者ではないという警告だった。次の一瞬で、ンケドウと少年はガラスを突き破り、表に飛び出していた。ンケドウの腕に少年の指が突き刺さったまま。突き出された手を腕で防いだのだった。

悲鳴が上がる。人々が何事かと一瞥し少年の正体を見抜くと、蜘蛛の子を散らすように一斉に逃げ出した。その間も少年はンケドウに攻撃を浴びせる。

馬乗り状態からの殴りに対し、ンケドウは受け止めることもままならずただ身体を庇う。しかし彼もただの素人とは違う。一瞬の隙を見出だし、少年の顔の側面に拳を放つ。それは避けられたが、体を少年の下から解放させることができた。

立ち上がり、睨み合うンケドウと少年。夜独特の冷えた風が二人を撫でる。

「ボクは争う気はない。これだけの騒ぎになるとハンターも来る。この辺にしておこうよ」

穴の開いた腕を擦りながら、ンケドウはそう促した。しかし少年は笑っただけだった。

「怖いのか？ 俺たちヴァンパイアがなんでニンゲンなんか怯えなきゃならないのさ」

少年の笑みは意味深長だった。どこから来るかわからない自信が、その笑みの裏側にありそうだった。指に付着したンケドウの血を舐めとる。

こいつは、ハンターに勝てるのか？ ンケドウはそう考えた。

その時、規則正しい足音が何人分か聞こえてくる。少年の耳にそれが聞こえると、舌打ちをした。

「これからがほんとにこなの。あいつら面倒くさいから相手にしたくないな。じゃあねえ」

最後に間延びした別れの句を付け、少年は走り去った。ンケドウはどうしたものかと一瞬反応が遅れ、気が付くところらに向かつて

走ってくる人影が道を塞ぐように走ってくるのが見えた。

半数が少年の逃げた方向に向かい、残りの人影がンケドゥを取り囲み、一斉に剣を向けた。

「ヴァンパイアの疑いがある。よって拘束させてもらう。抵抗は無意味だと理解せよ」

取り囲んだ人影の一人がそう宣告する。ンケドゥは表面上は平然としていたが、内心は焦りと恐怖に支配されていた。心臓が頭の中で脈打っているような感覚に見舞われ、そんな中でも精一杯冷静に思考する。

そうだ、ニンゲンを装えばいい。ニンゲンのフリをして疑いを晴らすんだ。ニンゲンのフリなら、得意だ！

そう行き着いたンケドゥの思考が、自分の正面に立つ男の一言で再び凍り付く。

「おまえのその腕の傷……。証言の通りだな。ヴァンパイアと思わしき子供の攻撃を受けていた子供。ヴァンパイアの攻撃を受けてなお、立っていられるなんて、少なくともニンゲンには不可能だな」

ニンゲンには不可能。遠回しにンケドゥはニンゲンではないと宣言しているようなもので、実際そうだった。ンケドゥを取り囲む輪が僅かずつ小さくなっていく。

ンケドゥは、男たちが発する匂いに覚えがあった。その生命の匂いはハンター特有の甘露なもの。彼を取り囲む男たちはつまり、ハンターだと言うことだ。

これは不味い。切っ先で皮膚一枚でも切り付けられれば、その傷口は異常な反応を示す。それはヴァンパイアと言っているようなもので、そうなれば次の瞬間には自分は屍となる。苦い表情を浮かべ、眼前に迫る刃の先を目で追う。

「まあまあ、そう殺気立つなって」

不意に聞こえてきた声に、その場にいる全員がそちらを見る。女

が一人、剣を杖代わりに立っていた。

「カナン！？」

ンケドウの呼び掛けに、よお、と軽く返す。剣を支えに、ふらりと歩み寄ってくる。二度三度転倒しそうになり、見兼ねたンケドウが囲いの脇を通り抜け、その肩を支える。

「おう、悪いな。……こいつはオレの弟だ。どうしてもやるってんなら、オレが代わりに相手になるぜ？」

そう彼女が挑発的に言い放つ。ンケドウを取り囲んでいた者達は、歯牙にも掛けない様子で剣を収める。幾何学模様に並び、歩調を規則正しく揃えて歩きだす。カナン達の脇を通り過ぎる時、先頭の男と彼女は嫌悪感を乗せた視線を交わらせた。

男たちの気配と姿が完全に無くなったのを確認すると、ンケドウは分かりやすいため息を吐いた。それを見てカナンは拗ねたように口を尖らせた。

「んだよそのため息は。オレがあいつらにやられると思ってたのか？ あんなやつら、片手で充分だよ、じゅーぶん！」

いつもの冗談めかした調子で言うものだから、ンケドウはその言葉が本当なのかどうか計り損ねている。

「……まあ、宿に戻ろうや。元氣そうに見えて実はぶっ倒れそうなんだぜー、オレ」

どう見ても元氣そうには見えないけど。そんなツツコミをンケドウは飲み込んだ。とにかく今は、一刻も早くカナンを休ませなければいけない。

彼女を引きずるようにして、宿へと向かった。

「……カナン・ダルダロス。まさか生きているとはな」

薄暗い照明だけが照らす大広間。車座をする十二の人影。その中央には女性が一人横たわっている。

「しかし、まだ我々の目論見を看破しているわけではない。何ら障

害にはならんだろう」

「そうだ、奴はまだ気付いていない。それに、見掛けによらず半信半疑で動く奴ではない」

「なら支障はない」

誰が発したかわからないが、会話がなされている。彼ら自身、誰が発した言葉か気にも掛けていないようだ。それは皆の思想が同じだと言えるからだ。

他にも議論を少々重ねていると、中央の女性が突然目を見開き、ゆっくりと起き上がった。

「目が覚めたか、鉄姫^{てつぎ}。調子はどうだ？」

先程、カナンと一瞬の睨み合いをした男が女性に問い掛ける。

「フフ、いいわよ、ベン。話は聞いてたわ。何ならあの女、私が始末して上げましょうか？」

妖艶の笑みを浮かべ、ねっとりとした視線を男に向ける。しかし、ベンと呼ばれた男は何の感情も込めない表情をするだけだ。

「今はまだいい。それより、やってもらう事がある」

それを聞いた女性の顔が、より妖艶になる。

「ウフフ、何でも聞いて、あ・げ・る」

ベンの顔もつられ、醜悪な笑みに歪む。それは、悪魔の微笑みに似ていたかもしれない。

彼の記憶 #2 (後書き)

まだまだ続きます。長いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8347b/>

おいしい彼女

2010年11月3日14時31分発行